

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA ^{でほら} 45

2015年



特集

地域の創造活動を
支援する



特集/地域の創造活動を支援する ●特集企画に寄せて



島根県海士町 / 町の民家を活用した学習センターで学ぶ隠岐島前高校生たち



島根県海士町 / 木の香と田園の風が流れる中央図書館内部



北海道夕張市 / 新団地に移住して快適だと語る柳原さん



岐阜県郡上市明宝 / 間伐材の活用を図る「もくもく市場」



山形県丹形町 / やまがた地鶏を飼育する庄司さん



長崎県対馬市 / 有害鳥獣の皮革活用を提案する島おこし協働隊の谷川隊員



高知県四万十市西土佐 / ガソリンスタンドを経営する株式会社大宮産業



長野県伊那市高遠町 / 民家を改装したレストラン「日々茶寮 連」



新潟県十日町市 / ビジネスコンテスト「トオコン」で発表する大学生



新潟県十日町市 / 農業体験等でまちに来る人に首都圏から無料バスを運行



福岡県八女市 / 市内を走る予約型乗合タクシー

紹介します。

国や県・市町村が支援する事業費は小さくても、創意工夫で大きな成果を上げていること、そして何よりも、人々が輝いて元氣あふれるまちや地域であることを実感しました。

「でぼら」45号では、過疎対策事業債ソフト事業等をうまく活用している地域を紹介いたします。集落の維持・活性化、地域医療の確保、生活交通の確保、教育文化の振興、産業の振興、交流事業等のソフト事業の一例を、各地で取材させていただきました。

過疎対策は、昭和45年に過疎法が制定されて以来、四次にわたる法改正のもと、公共施設の整備や様々な地域活性化事業で一定の成果を得てきましたが、人口減少と高齢化がさらに進み、農林産業の衰退、交通機関や地域医療などの身近な生活の維持が難しい地区も増えています。そのため過疎対策事業債の運用に当たっては、地域主体・住民生活主体の事業へ主眼をおき、地域がその特色を生かして意欲と自主性をもって取り組めるようするため、従来のハード事業に加えて、ソフト事業の一層の充実・拡大に取り組んでいます。

今回は、集落の資源を活用して創意工夫する事例、廃屋や空き家を撤去してコンパクトシティをめざす事例、島おこし協働隊の活動や島に高校生を招く島留学制度、交通体制の整備等に取り組み町や地域を紹介いたします。

特集/地域の創造活動を支援する

●特集企画に寄せて——2

■集落の活性化

●集落再生をめざす小さなユートピア郷

[株]大宮産業][みやの里] 高知県四万十市西土佐——4

●移住してくる家族をバックアップ

[定住促進事業][空き家バンク制度]

長野県伊那市高遠町——8

●地域で安心して幸せに暮らす

[ゆうばりコンパクトシティ構想] 北海道夕張市——12



■教育文化の発信

●各分野の専門家が地域に根を張って

[対馬市島おこし協働隊]の活動 長崎県対馬市——16

●自然と地域の中で輝いて学ぶ[島留学]

島根県立隠岐島前高校 島根県海士町——20

●島まるごと図書館プロジェクト

身近に本があり、会話が弾む町に 島根県海士町——24

●学生の提案をビジネスに生かす

十日町市ビジネスコンテスト[トオコン] 新潟県十日町市——25



■暮らしの知恵を次世代に

●風土に合った「小さな農業」の創出

[チャレンジ農業実践塾]

山形県舟形町——28

●山里の暮らしの知恵と資源を活用して

[もくもく市場][栃尾里人塾]

岐阜県郡上市明宝——32



■交通体制の整備

●地域の見守り役も担って

予約型乗合タクシー 福岡県八女市——36

●農業体験・ボランティア活動に無料バス

緑の直行便[グリーンライナー] 新潟県十日町市——38

■INFORMATION 39

過疎対策事業債(ソフト分)の主な事業と活用状況等
全国過疎問題シンポジウム「2015 in かがわ」のお知らせ
編集後記 奥付け

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

上/「チャレンジ農業実践塾」。おかひじき倶楽部の三浦さんと山川指導員(山形県船形町)

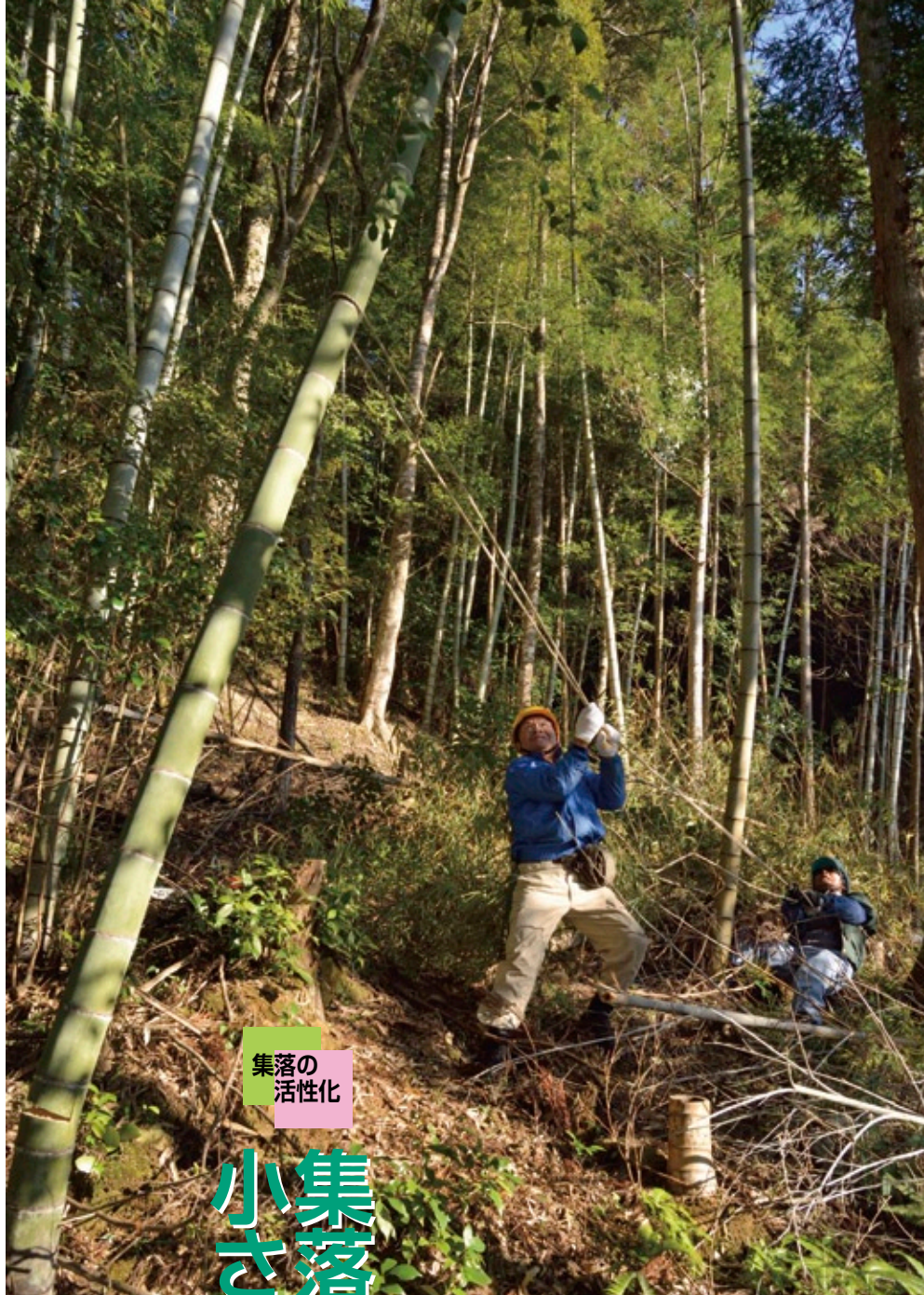
下左/東北から移住してきた大井さん一家の子供たちと愛犬(長野県伊那市高遠町)

下右上/夕方になると街は高校生や指導の先生らで賑わう(島根県海士町)

右下/自然エネルギーを活用、ふるさと栃尾里山倶楽部の民家(岐阜県郡上市明宝)



▶竹藪の伐採作業をする
大宮地区の住人たち



愛媛県と接する高知県の県境の集落に株式会社大宮産業がある。住民が出資してガソリンスタンドと店舗を運営、稲作の受託や森林保全活動等にも取り組んでいる。JA出張所の撤去に伴い、自分たちで何とかしなくてはと住民が知恵を出し合って、給油所と店舗施設を買い取り、修繕した。会社は地域住民が利用することで何とか維持運営してきたが、人口の減少と高齢化は避けがたく、売り上げも頭打ち。そのため平成24年より高知県や総務省の制度を活用して、新たな地域振興事業に取り組み始めた。

森の中の桃源郷・大宮地区

愛媛県境にある旧西土佐村大宮地区は、愛媛県宇和島市まで約32kmだが、四十十市の中心街・中村へは約50kmある。高知空港からは一度宇和島方面へ出て、愛媛県松野町から南下することが一般的で、住民の買い物や医療等の生活圏も宇和島地域の利用が多い。
松野町から大宮集落に入るまでは深い森の中を車一台がやっと通行できる道路がS状に続くが、大宮集落に入ると、道路沿いや斜面

集落の
活性化

集落再生をめざす 小さなユートピア郷

〔株〕大宮産業「みやの里」

●高知県しまんとしじとさ四十十市西土佐



▲四十十川の支流・目黒川沿いに広がる森と田畑
◀株大宮産業経営のガソリンスタンドと売店



▲岡山さん(右)と
買い物客との話が
弾む
◀大宮産業の職員
左から、竹葉社長、さ
ん、岡山さん、矢
間さん



▲開店と同時に毎朝珈琲を飲みに来る近所の男性

の森はよく手入れされていて、晩秋の山林風景を満喫しながら快適に走行できた。間もなく四万十川の支流の一つ、目黒川沿いに水田が広がる美しい里山風景が現れ、コスモ石油の看板や売店のある堅牢な建物が見えてきた。元J Aが使用していた古い建物に(株)大宮産業という文字が書かれている。裏手は新しい建物に改装され、玄関脇に「大宮集落活動センター・みやの里」という看板も立っている。

奥の部屋で、(株)大宮産業代表取締役竹葉傳社長(70)と西土佐支所地域企画課地域振興係長上岡史卓さんが待っていてくれた。

「平成16年末にJ A大宮出張所が廃止になるという話が出た時は大変でした。廃止反対の委員会を作り、利用を促進する、一日1000円を貯金する、署名やカンパ等々をしてJ A

存続活動を全住民で続けたのですが、翌17年10月には廃止が決まりましたね。それなれば農協事業を地区が継承していきたいと検討し、大宮地区の大半の住民108人が株主として700万円出資して、18年5月に株式会社大宮産業を発足しました」と竹葉社長は当時のことを淡々と語る。

四万十市は平成17年に旧中村市と旧西土佐村が合併して誕生。四万十市の人口は約35000人だが、旧西土佐地区はその約10分の1、大宮集落はさらにその10分の1の133世帯294人が住む。昭和50年の528人に比べると半減し、高齢化率も49%に達している。

若い時は農協に勤めていたこともあるという竹葉傳社長は、大宮集落の活性化のために働いた。その実績が買われて(株)大宮産業の代表取締役に就任した。

「家は農家です。露地栽培でミョウガを作り、当初は良かったが一パック60円では採算が合

わない。続いてシントウ栽培を手がけたが、これも採算が合わない。今は米だけです。大宮米はこの山間部の寒暖の差を生かして栽培するためうまい米として人気。ブランド米として生産の復活に力を入れ、販路も広がっています。水田を維持するため、高齢農家から委託を受けて現在2町4反を耕作しています」と竹葉社長は語る。

売店は広いスペースに食品から生活日用品、農機具まで一通り豊富に取り揃えられ、一般スーパー並み料金で売られているが、肉・魚介類等の生鮮食品は従来からの業者が週2、3回地区を巡回販売するため売店では扱っていない。ガソリンスタンドはレギュラー、軽油、灯油共に市街地とほぼ同じ料金だ。「石油価格に合わせて変更していますので、ほかより安いことが多く、他所からもやってきます」と、職員の岡山礼子さんは言う。岡山さんは元J A職員、大宮産業に入社して竹葉社長の片腕として事務経理を担ってきた。

売店もガソリンスタンドも絶えず客が来て、よく賑わっている。「地域の人自分たちの店という意識を持って利用してくれていますから、何とか赤字にならず運営しています」と竹葉社長は言うが、販売量は集落の人に限られているため、役員の報酬をカットする等して運営してきた。

売上額は会社設立時の平成18年が年間約3600万円だったのに対し、お米の販路拡大や農業資材の販売、ガソリン給油者を増やす等の努力で利用拡大を図り、20年には6300万円を超えた。しかし地域人口の減少は避けがたく、現在一日当たりの利用者は



1000人で、売上額は6200万円になっている。

集落活動センター「みやの里」が開所

大宮地区の過疎状況と大宮産業の5年間の経営努力に注目、支援に乗り出したのが高知県と四万十市だった。大宮地区にある3集落全体で地域の課題や住民の不安をもう一度整理し「支えあいの仕組み」を再構築する、事業の効率化や交流活動の充実、地産外商の推進等を図り、そのために必要な助成を行っていかうというもの。そこで平成25年5月に新たに設立されたのが大宮集落活動センター「みやの里」だった。

西土佐総合支所地域振興係長上岡史卓さんがこれらに関する資料を用意してくれていた。「大宮地区には上中下と3集落があります。23年から大宮産業の役員、全地区の役員、各団体の方に集まってもらって協議を何度か行い、大宮地域振興協議会を設立しました。同時に総務省の過疎集落等自立再生対策事業も活用して大宮産業施設に隣接して交流施設を

開所しました。大宮地区は住民の参加意識が高くよくとまっています。過疎が進行する高知県各地のモデル集落になると思います」と上岡さんは言う。

当日は24年に四万十市が導入した地域おこし協力隊員6名の一人、竹本圭吾さん(32)も同席した。大阪から昨年春に移住してきたうえで、「まだ農家や林業を実際に手伝ってはいませんが、各所に出かけて報告書をまとめるなど、大宮地区の担当として忙しい日々を送っています」と言う。

大宮産業の建物と隣接して開設された集落活動センターは、多目的に使える部屋が2室と、設備が完備した広い厨房、研修室がある。集落の中心街にできた交流施設として、毎週のように高齢者や婦人グループに活用されている。大宮産業が開設されて以来毎年開催されている「感謝祭」も8回目となり、地域のお母さんが総出で惣菜や弁当、菓子・ケーキ等を作って振舞う。交流施設が出来たことから、高知県内に住む若者や家族たちに大宮の自然が育んだお米・野菜等の美味しさを知ってもらおうと、田植え体験、薪で炊いたご飯の食事会等も開催するようになった。

また昨年からは、農家が栽培・販売する野菜はセンターに朝持参してもらい、活動センターの職員が西土佐江川崎にある道の駅へ出荷する体制を作った。中堅農家は個人で出荷しているが、小規模農家が数個の野菜を持って狭い山道を経て江川崎へ20分以上かけて届けるのは大変なこと。いま一部で道路の拡張工事を行っているが、支所までは20kmもある。

朝8時半、大宮産業職員の岡山さんと野菜

出荷運搬を担当する刈谷智恵美さんが出勤してきて店を開けた。残念ながらその日は持ち込まれた野菜がなく、「昨日までは朝もぎの白菜などが沢山届いたのですが——撮影できなくてすみませんね。みやの里の名札をつけた野菜は美味しいと人気でよく売れるんです」と刈谷さんは申し訳なさそう。一昨年大工さんとして活躍していたご主人を病気で亡くし、義母と二人暮らし。「ショックで寂しい日々でしたが、ここで働けることになり、皆から励まされ、自分も地域のために頑張りたいと充実した日々になりました」と語る。

店のシャッターが上がると、早速年配の男性がやってきて、熱い缶珈琲を手にソファに座る。毎朝来てここで喋りするのが日課だという。ガソリンスタンドも出勤前に立ち寄る住民が多く、岡山さんが対応しながら「今日はちよつと冷いね」と客の女性と話している。大宮産業では活動センターの開所に伴い矢間栄三さん(30)を社員に採用、矢間さんは主に宅配サービス係として集落を巡回している。

森林作業も地域住民で

午前9時から地区内の竹林整備作業が行われる場所へ竹葉社長が案内してくれた。集落の90%は山林。森林の整備は森林組合が行っているが、個人の雑木林の整備は行われず、家屋敷に竹や樹木が覆いかぶさっているとこもある。そのため、補助金制度を利用して大宮地区の男性群からなる「お助けレンジャー」、みやの里戦隊」が山林整備や草刈り、道路普請等に力を入れている。

▶「大宮のお米は美味しい」と語る刈谷さん右/地域おこし協力隊で大阪からきた竹本さん。危険な屋敷林がないかと調査している(眼下に大宮産業を望む)下/増築された「みやの里」事務所で、竹葉社長と西土佐総合支所地域振興課上岡さん





◀これから屋敷林の整備活動。山仕事のプロたち8名が集合、竹葉社長の挨拶のあと各地へ散って行った。左／道路わきの樹木を間伐するグループ。小さく切断した木は森の奥へ運び堆肥にする

その日は川上幸子さん宅。石垣の上に広い家屋と庭があり、裏手は木々が密集する山林になっている。特に竹林が広がって、その枝が家の屋根まで達している。

「昔は竹も竹の子も農協へ出荷して小遣いになったもんだがね、今は引き取り手はどこもない。主人が死んでからは山へも入らんかったから、木も枝も伸び放題だや。何とかしなければと竹葉さんに相談したところ、活動センターが間伐を無料で引き受けてくれた。ほんま優しくて頼りになる人ですわ」と川上さんは言う。

間伐作業には10数人が参加、竹葉社長の挨拶に続いて二班に分かれて早速山へ入った。もう長いこと手が入っていないため、斜面は竹が茂って日陰を作り、カシやシイ、杉、樺等も競って伸びている。作業員たちは木の幹にロープを張って安全を確認しながらチェーンソーで切断、それをさらに細かく切ってきちんと一か所に積み上げてい

く。豪雨等で土砂や間伐した木が流出しないように間引きと整備には細心の注意を払うという。山林と屋敷の堺には鉄の柵が張りめぐらされ、鹿やイノシシ等の侵入を防ぐ処理もなされていた。

道路沿いでは別のグループが枝打ちを行っている。切った枝は細かく切断して山の中に運び込んで堆肥にするそうで、トラックに運び上げる。山の作業は高齢世帯では無理で、ベテラン集団だからこそ出来る重労働であることを実感した。

これらの作業状況をカメラにおさめてメモを取っているのが地域おこし協力隊の竹本さん。「作業員には70歳以上の方もおられるのに、皆元気で凄い腕前ですね。僕などようやく山の斜面を早く歩けるようになりました」と汗びっしょりで語った。

高齢者を独りにしない

宿泊させてもらったのは農家民宿「やまびこ」を営む岡崎恵司・早智さん夫妻の家。ご主人の恵司さんは奈良の墨彩彫刻を担う老舗の出身だが、それを嫌って大阪の鉄工所で働き、早智さんと知り合って結婚。定年後に早智さんの両親が住む大宮へIターンした。客が宿泊する離れは両親用に建てた本格的木造住宅で、近代的な台所や洗面所も完備している。両親の死去後は、観光客を増やしたいと民宿施設として活用することにしたという。

恵司さんは世話好きで温和な人柄から、頼まれてNPO法人「いちいの郷」の理事長を



農家民泊を始めた岡崎さん夫妻。広いモダンな離れと美味しい手料理がおすすめの宿

し、料理の得意な早智さんは、デイサービスに

来る高齢者に昼食を毎日20食ほど作って届けている。頂いた料理は絶品であった。NPO法人いちいの郷が運営する「あつたかふれあいセンター」はかつて縫製工場があった場所を改装して作られた大宮地区の高齢者の交流施設で、独り暮らしのお年寄りの生活支援をするほか、一般の人を対象にした趣味教室も開かれている。壁には絵や書の商品が並び、各所に恵司さん手創りの木製椅子やテーブルが置かれていた。隣接して昨年オープンしたのが民間企業が運営するグループホーム「紡ぎの家」。田園の中に建つ明るくモダンな建物で、8人の介護士が市内の認知症の9人を24時間体制でケアしている。目の前は水田、緑の風が心地よさそうな施設で、入居者の顔はとても明るい。

皆がいろいろな役割を担いながら、支えあい、生涯現役で活躍している大宮集落の人々。ここは、四万十川源流の森の中の小さな理想郷であった。

文／浅井登美子 写真／小林恵



▶「日々茶寮 連」の古民家を
生かしたレストラン



桜の名所「高遠城址公園の桜」に代表される美しい自然と歴史を持つ城下町・伊那市高遠町。茅野から杖突峠を越えて南アルプス山麓を南下して高遠町の市街地に至る国道152号は秋葉街道または塩の道と言われて講に通う人や物資を運ぶ人で賑わった。街道沿いに流れる藤沢川周辺は水田地帯、広葉樹の山々に沿って畑が広がる。典型的な里山で、この地域は田舎暮らしを希望する人たちに人気のエリアでもある。

集落の
活性化

移住してくる家族をバックアップ

「定住促進事業」空き家バンク制度

●長野県伊那市高遠町



▲秋葉街道沿いにある高遠町の田園地帯



▲薪ストーブが明々と燃える吉田さん宅居間



▲大井さん夫妻が収穫したユニークな野菜たち

伊那市は平成18年3月に東部地区の高遠町、長谷村と合併。中央を天竜川が流れ、西に中央アルプス（木曾山脈）、東に南アルプス（赤石山脈）の3000m級の山々に抱かれた景観抜群の自然郷。東京と名古屋のほぼ中央に位置しているため商工業、電気、精密機械産業等、高度な加工技術産業が盛んな小都市として発展してきた。

そんな中で、南アルプス山麓にある高遠町は城下町として発展、歴史や文化財が多く、信州そばの発祥の地、天下第一の桜の名所として知られる。城下町風情を再現した瀟洒な街並みや田園の景観が魅力的な観光地である。しかし他地区と同様に、農林業を生業としてきた農村部は若年人口が流出し続け、過疎化と高齢化が進んでいる。

そのため伊那市は、高遠町・長谷地域への

若者の定住を促進するため「過疎地域定住促進事業」を平成22年よりスタートさせた。この制度は、若者（15〜45歳）に対し、住宅新築又は増改築、空き家を取得する場合、空き家バンクに登録した家屋を改修する場合は上限150万円、廃屋取り壊しには10万円を上限に補助金を支給するもの。ほかにU・Iターンした若者や若者を含む世帯には定住助成金、通勤手当（一部地域）、出産祝金制度もあり、平成32年まで補助金等を交付することになっている。

この窓口となっているのが、高遠町総合支所と長谷総合支所の各総務課地域振興係。高遠町総務課地域振興係堀川稔子係長からお話を伺い、高遠町に移住してきた3家族を取材させていただいた。

右上/座敷はゆっくりくつろげる食事処として人気
 右下/購入した民家の外観
 左上/魚介類と季節の野菜の創作料理「彩り御膳」
 左下/樋田猛・牧子さん夫妻



古民家で旬の料理を味わう、極上のひと時

国道152号から一步入った路地に「日々茶寮 連」と小さな看板を出す店があった。大きな二階建ての家で、入口に小さな暖簾がかかっている。注意してみないと通り過ぎてしまいそうな控えめな看板があった。玄関のガラス戸を開けると古い民家らしい小さな土間になっている。靴を脱いでスリッパに履き替え、黒光りする木戸を開けて驚いた。広々とした古民家の佇まい、そこはお洒落なテーブルや調度品を配した粋な空間。昼食で訪れた客が、静かに食事を楽しんでいる。予約なしに訪ねてしまった私たちが、食

事をしたいとお願いして奥の和室に案内していただいた。民家によくある伝統的な奥座敷で、床の間や欄間、ふすまが美しく保存・再生されている。さらに、部屋の一角に置かれた陶芸品や生花、テーブルクロス等が、趣味人らしい店主の粋な演出と気配りを伺わせる。出された食事がまた素晴らしかった。地元産の野菜たちが見事に共鳴して美しく美味しい創作料理に变身している。

樋田猛さん(60)と牧子さん(39)は、昨年6月に長年営んでいた鎌倉の割烹料理店をたたんで高遠町に移住してきた。

「鎌倉ではとても忙しくて主人が身体を壊してしまいました。それで、田舎で長閑に暮らしながらお店をやりたいと探していたところ、地元の明和不動産の民家売り出しの写真をブログで見たんです。天井が高くよく整備された広い居間。内部写真を見てひと目で気に入って、すぐ購入を決めました。高遠が桜で有名な城下町であることは来るまで知りませんでした」と猛さんと牧子さんは苦笑しながら、移住してきた経緯を語る。

元は郵便局長の住まいだったそうで、太い柱や障子、欄間等の日本家屋だが、天井を高くしてガラス張りの洋風な居間に改装する等、快適に住む工夫が施されていた。その空き家を地元大工さんが手を入れて丁寧に磨き上げた。洗面所等は新たに木の香を生かして全面改装、樋田さんの指示でオープン式の厨房を作り、上下水道設備を新たに設置した。

「レストランはほとんど手を入れないで使用でき、鎌倉で使っていた調度品もマツチしています。残念ながら水道管が玄関脇に露出し

てしまったため、とりあえず葦簀あしを並べて隠しています。外側はこれから若干の手直しが必要ですね」とご主人は言う。

地元の人の紹介で、箕輪町で有機野菜を栽培する「草間舎」の滝沢さんとも知り合い、野菜の大半をそこから仕入れると共に、新しい野菜栽培を提案したり、地元農家が作った梅や果実液等を活用して、独自の創作和風料理を生み出している。さらに鯛やマグロ等の魚介類は鎌倉時代から親しかった専門店から直送しており、野菜と絶妙に調和している。ちなみに、昼メニューは「蕎麦とミニ丼」蕎麦御膳「彩り御膳」の3品で、夜は予約客のみに会席料理を提供している。鎌倉から樋田さんの料理が食べたいと訪れる人もまだまだ多く、野菜や蕎麦が一段と美味しくなったと褒めてくれるという。

「転居してきて、近所の方に大変お世話になりました。そのため開店二日間は皆さんをご招待させていただきました。以来近所の方もよく訪れてくれます」

鎌倉ではレストランが住宅地の中にあつたが、家賃と光熱費で月40万円かかった。「田舎暮らしの夢がかないましたが、高遠の冬は寒いので2月は休業して、自然と親しみながらゆっくり過ごします」と牧子さんは言う。

町からの定住促進補助費132万円は、玄関のリフォームに充てるのに役立った。

第二のふるさと。

地域のために働きたい

2年前に長藤地区に新居を建てたという吉田康二さん一家を訪ねた。長藤地区は目の前



▶新居の前で、吉田康二・江里加さん夫妻。下は次女のひなちゃんと居間で左/カーボン屋根のある庭で、愛犬忠君
◀森林組合主催の「アウトレット市」で安く販売される板



は水田地帯、後手はなだらかな広葉樹林が広がる比較的大きい集落で、50戸ほどの民家が軒を連ねている。その中ほどに建つ瀟洒でモダンな二階建ての家が吉田さん一家の新居。ゆるやかな斜面を活用して、道路際に車の駐車場を設け、一段高いところに家、裏手は森へと続き、大きな栗の木がたわわに実を付けていた。家の北側には焚き木用の薪が美しく塀のように並べられ、庭では愛犬が飛び回っている。冬や雪に備えて、中庭や物置、薪置場等は、透明なカーボンの屋根を施す等、アイテムに富んだ家である。

吉田さん一家は上伊那森林組合で働く康二さん(47)、妻でヘルパーの仕事をする江里加さん(46)と二人の女の子を持つ4人家族。東京柴又の出身。田舎暮らしを漠然と考えていた時、信州高遠町が新築の町営一戸建住宅に入居する移住者を募集している雑誌の記事を見た。小さな庭付きで家賃は月3万円、Iターンに踏み切った。8年前のこと。

自然環境が素晴らしく、地域の人は親切。

康二さんは東京ではコーヒーの通販会社に勤務、信州高遠町に移住してきて地域に役立つ仕事がしたいと、森林組合に勤めることにした。江里加さんも同様で、子供が学校へ上がるのを機に、社会福祉協議会が行うヘルパーの資格を取って介護施設で働き始めた。いまではケアマネージャーとして高齢者の介護になくてはならない存在になっている。

そんな二人を支えたのが二人の娘たちだった。田園の中のびのびとたくましく育ち、高遠が大好きになった。長女のかなたさん(17)は、農業に関心を持ち、農業高校を志願、毎朝7時頃に母親が車で送って上伊那農業高校へ通い、土曜日も部活で忙しい。次女のひなたちゃんは高遠北小学校の5年生。「一学年10人だけど、とても楽しい」と語る。

移住のきっかけとなったお気に入りの町営住宅は分譲しないことが判明した。それを知った地域の人たちが「このままここで暮らして欲しいから」と土地の世話をしてくれ、家の建築では地元の大工さんが親身になって対応してくれた。

「土地は格安で120坪を購入、新築する家は大工さんにこれしかありませんと予算を言ったところ、こちらの要望をよく聞いてくれる自由設計にしてくれました。窓はすべて二重窓、天井も高く、収納スペースもたっぷりです、とてもお気に入りの家になりました」と江里加さんが各所を案内してくれた。

康二さんが居間でストーブに薪を入れた。「ストーブ一つあれば、真冬でも家じゅうが温かい。いま県や森林組合では間伐材でペレットを作って普及を図っていますが、割高で

あるのが課題ですね」

森林組合では康二さんら若い職員の提案で、11月中旬に間伐材の有効利用と木の魅力をアピールする「アウトレット市」を開催している。木材にふれる機会が減ってきた田舎の人たちが、価格の安さもあって組合が用意する木材や各種板、木製品を買い求めていく。

「山村で暮らしながら、山に入ったことがない人が多く、私たちのように都市から来て森林作業に従事する者が増えている。地元の人をもっと故郷の自然や森に目を向けて欲しい」と願う吉田さんは、毎朝片道約1時間かけて駒ヶ根市の組合事務所へ行き、そこから仲間たちと山林へ入り、間伐や枝打ち作業を行っている。

農業をめざして東北から移住

吉田さんの住む集落からトンネルをくぐってひと山越えすると、さらにかくつかの小さい集落があった。森と川と畑の中に大きな農家20戸ほどが軒を寄せ合うように建ち、雨でけぶっている。眼下に見る山室川辺地区はおとぎ話に出てくる里山風景を見ているようだ。

訪ねたのはここに昨年の春移住してきたという大井友継さん(58)、美穂さん(35)夫妻と4人の子供たち。

集落の中央の道を進んでいくと、庭先にチャボの鶏舎があり、犬小屋に傘をさしてもらっている子犬が愛想よく迎えてくれる大きな農家があった。広い玄関と土間には野菜や農具、子供用自転車等が並んでいる。

大井さんの家とわかり、玄関に立つて声をかけると「いらっしやう」と元気な子供た



▶大井友継・美穂さん夫妻と蒼楽(そら)君(2)、亜美(あみ)ちゃん(小学2年) 秘歌(まりか)ちゃん(5)。左/居間の子供机の前ではしゃぐ子供たち

ちが3人飛び出してきた。部屋が7、8室はある大きな農家で、食堂には大きなテーブル、廊下には雨で取り込んだ洗濯物が沢山並んでいる。休日でご主人も家におり、早速玄関脇の15畳ほどの居間に通された。

「春夏は家中のドアを開け放して風と太陽を取り込むのですが、寒くなるとここで過ごします」と大井さんは言う。大きな薪ストーブが用意され、隅には子供が勉強する机もある。

農業に関心を持つ大井さん夫妻は、福島県川俣町での農業研修で知り合い、結婚した。そして有機農業の先進地、宮城県丸森町で農業を始めたが、そんなとき3・11東日本大震災に遭遇した。地震の被害は何か免れたが、丸森町は宮城県内では放射線量が多い地区であったため、二人の幼児を抱えていた夫妻は移住を決意した。

移住したのは美穂さんのお母さんの実家がある伊那市に隣接した南箕輪村。幼い時からよく来ていた農家だったので、快く同居させてくれて農地を借りて野菜作りも出来たが、いつまでも好意に甘えているわけにはいかな

い。そんな時、伊那市のホームページ「空き家バンク」で見つけたのが、現在住んでいる農家だった。家主の夫妻は高齢化したため子供の住む市街地に移住し、時々野菜作業をするために出かけてくる。そのため、庭先には家主の蔵や農具の収納場所もあるが、家は空き家にするに劣化しやすい。伊那市からの熱心な要請もあって、空き家バンクに登録し大井さんに貸し出すことになった。

大井さん家族は月1・5万円で借りている。農地は借りられなかったが、周辺にある休耕地をいくつか借り、また実家の農地も引き続き耕作して野菜栽培をしている。「今年私は妊娠中だったため、まともに農業ができませんでした。でも自然農法をするのが夢、ここには沢山の可能性があります」と美穂さん。友継さんは障害者施設で働いている。「いまはまだ農業収入だけでは暮らせないため、平日は勤め、土日は野良仕事や子供の相手、大変ですよ」と苦笑。

玄関の土間には種類が異なる大小のカボチやジャガイモ等が沢山並んでいて、食用だというホオズキもあつた。「いまは農産物があまり出荷できず、東京の方数人と千葉県の産直を手がけるグループに定期的に送っているのですが、農業一筋、新野菜にも挑戦してみたいと思います」と美穂さんは言う。

大井家の前には大きな屋敷があるが、普段は無人でお盆の時だけ人々が集まってくるという。隣家も無人で、ここで暮らしている人は10軒ほどになった。それだけに大井さん一家が来て子供たちの声がするようになったと喜ばれている。

野山で遊ぶのが大好きという元気な子供たち、犬や鶏たち、そして農業に夢を持ち続けている夫妻の姿は、ひと昔前の農村風景に出会ったようで感動的であった。

難しい「空き家バンク」の活性化

伊那市では「空き家バンク」制度にも力を入れて、インターネットで詳しい情報や写真、間取りを紹介しているが、現在市が登録している空き家は5軒。「新たな動きがあるのですが、問い合わせがあるほど人気なのですが、空いていても貸さないという人が多いのが実情です」と堀川さんは言う。

空き家が多いはずの過疎地で、住宅貸し渋り、傾向があるのは関東地方が顕著で、一般社団法人「移住・交流推進機構」が今年1月に中山間地に空き家情報を提供する「空き家情報バンク」を活用している約700の自治体に登録物件を尋ねたところ、「9件以下」が過半数を占めていた。

伊那市の場合、空き家バンクの登録総数は28件で、契約数は23件。その結果12家族26人が移住してきた。市では不動産組合と連携して交渉や契約に当たっているが「空き家になっただけでも、益暮れには家族が集まる、仏壇や荷物があるなどを理由に貸すのをためらう人が多い」と関係者は言う。

「空き家が増えると集落の活力ある維持が難しくなり防犯上も問題です。空き家の活用が地域にとつていかに重要かというのを理解してもらえらるよう、我々も物件の掘り起こしに力をいれています」と堀川さんは語っていた。

文/横田塔美 写真/小林恵



集落の
活性化

地域で安心して暮らす 「ゆづりコンパクトシティ構想」

● 北海道夕張市
ゆづりし

炭鉱抗口の周辺に集落が点在する夕張市には、炭産時代の不十分な施設や崩壊の危険性がある民家、老朽化した公営住宅が点在している。ピーク時に12万人近かった人口も1万人を切り少子高齢化がすすんでいることから、市ではこれらの危険施設を解体撤去して、集落単位の住処がある程度まとめて住民が安心して快適に暮らせる「コンパクトシティ構想」の実施に着手した。債務を抱えて行政サービスも制限がある中で再生事業だが、10年20年を見据えた長期的な都市構想は、過疎化が急速に進む日本各地のモデル事業になると思われる。鈴木新市政の挑戦が始まっている。

炭鉱の面影を残す豊かな自然郷

夕張市へは新千歳空港から46km、道東自動車道で1時間で到着する。夕張川とJR夕張線に並行して走る国道452号沿いには変化に富んだ自然景観が次々と展開し、初冬の小春日和の中で穏やかに輝いている。まず出迎えてくれるのが夕張川の浸食によって作られた溪谷美と大正14年に「北炭」が建設したという小規模水力発電所のある「滝ノ上公園」。樹木は葉を落としたが、地面をドングリヤ木の実が覆うほどの豊かな自然郷だ。

国道を東北に行くと、やがて森が切れて市街地が現れた。民家や企業が立ち並ぶ中に新旧の市営住宅建物が目立つ。夕張市の南の

▲かつて夕張線と呼ばれて石炭輸送で活躍した石勝線支線は、現在JR新夕張駅と夕張駅を片道30分で走り、観光客や鉄道ファンに人気。ズリ山は木々の茂る森になってきたが、民家には空き家が増えている



◀食事処・交流の場として人気の「ゆうばり屋台村」。
8軒の店があり各店が自慢のメニューで競う。村長のつるちゃん(左)と夕張市地域おこし協力隊のメンバーたち
▼11月から休館して静かな時を過ごす「幸福の黄色いハンカチ」思い出広場



中心街で、道の駅が賑わっている。周辺には夕張メロン栽培農家が多く、春夏は車が渋滞してしまうほどだが、この時期は農協もメロンドームも閉店して休息中。

やがて夕張市の中心部・清水沢地区へ。炭鉱事務所や住宅、ズリ山等、炭鉱時代の遺産が数多く残っており、60カ所あるというズリ山も今では木々が茂る穏やかな森へと変身している。その先を右手に上がっていくと、炭

鉱住宅をロケ地にした映画「幸福の黄色いハンカチ」思い出広場がある。11月から休館していたが、後日高倉健の死去に伴って開館した。我々が訪ねた翌日から北海道は吹雪となったようで、雪が積もる広場に黄色い旗がたなびくさまをテレビで拝見した。

J R夕張線の終点・夕

張駅には木造の観光センターを兼ねたお洒落な駅舎があり、その広場にオープンした飲食施設「ゆうばり屋台村」が大賑わいしている。一部に炭鉱の古い材を使用したユニークな建物で、小さな店が8軒あり中央にテーブル。つるちゃんこと橋場村長が人気者らしく、ここで大勢の元気な人たちと出会うことができた。地域おこし協力隊で昨年来市した高橋さん、原さん等にも出会えた。一時間に一本やってくる電車も観光客に人気のようなだ。

その先にあるのが市役所や鉱山時代に賑わった飲食街、病院（いまは診療所と名称を変え）、そしてその北部には日本最大級の石炭・鉱山博物館がある。国内有数の産炭地で、昭和35年頃の最盛期には12万人が暮らす道内7番目の都市だった。しかしその後の原油輸入自由化でエネルギーは石炭から石油に変わり、56年に発生したガス爆発事故で、夕張のヤマは相次いで閉山に追い込まれた。平成元年には人口24000人となり、さらに「炭鉱から観光へ」の過大なりゾート開発と放漫経営がたたり、夕張市は財政破たん、全国で唯一の「財政再生団体」になった。多くの関係者がまちを去り、現在人口は5481世帯、9719人になっている。

街を歩くと往時の繁栄の面影が忍ばれる一方で、30年以上の時を経て崩壊寸前の施設や廃屋も目につく。

不要で危険な施設や廃屋を解体撤去する

夕張市では、劣化し風雪等で崩壊の危険性がある建物や廃屋を解体撤去して、地域ごと

に安全で便利な街に再生する「ゆうばりコンパクトシティ」構想を、平成24年から実施しはじめた。過疎対策事業債（ソフト分）を活用して不用施設の解体・撤去費を行った事例でもある。

まちづくり企画室主幹佐藤学さんから、解体撤去とその跡地の再編事業についてお話を伺った。

「夕張には炭鉱時代の不用施設や古い住宅がまだ各地に点在しています。鈴木新市長がまず手掛けたのがコンパクト化を進める『夕張市まちづくりマスタープラン』でした。財政破たんまで市職員は半数以下になり5カ所あった市の出先機関も閉鎖、小中学校もそれぞれ一校に統廃合されました。廃校校舎は建物が堅牢で十分活用できるため民間機関などに活用してもらっていますが、市営住宅の再編が重要課題でした。道営と市営住宅の戸数は3706戸あり、中には風呂がない住居もあります。すでに古い建物を撤去、住民が新築した住宅へ入居した歩団地や萌団地もあります。解体が必要ない団地でも、高齢者がポツリポツリと住んでいる状況では管理がしにくく安全上好ましくないため、集約化していく必要があります」と佐藤主幹は言う。

しかし住民からは、いまさら引越は面倒だ、空き家でも昔高額で購入したので手放せない等の声もあり、話し合いを続ける。家主に連絡が取れないケースも多く、事業を推進するためにはかなりエネルギーが必要である。

24年度は旧夕張青年婦人会館など市の施設52棟、市に寄付された廃屋や空き家など9棟を解体撤去し、事業費は1億8900万円(う

▶豪雪のために破損した空き家。持ち主の了解を得て撤去するまでの手続きが大変だ



▲解体予定の図書館について説明する佐藤企画室主幹
▼料亭や飲食街で賑わった一角は危険木造家屋の解体撤去が進む



ち1億2350万円を過疎対策事業債で充当)。他に民間・個人が解体撤去した3棟を除却費の30%（上限20万円）を補助した。

佐藤主幹が、市役所近くにある解体予定の施設と解体跡地へ案内してくれた。

まず市役所すぐ近くにある3階建て鉄筋コンクリートの図書館へ。川つぶちに建っており、湿気のため劣化が著しい。平成27年に解体を予定しているが、地下室にはまだ資料等があるようで、解体撤去代は2000万円になるといふ。向かいに建つ警察署も古いが、耐震用の杭等を施して維持。またその北部にある大きな3階建ビル・旧夕張病院は、診療所になったのを機に建直しの要望が住民や医療関係者から出たが、施設改装の前に医療体制の充実が必要だと事業を見送った。内部は古めかしいが、医療機器も充実、広いスペースを生かして高齢者の短期入院やデイサービスセンターに活用されている。

炭鉱で栄えた頃に料亭や飲食店が軒を連ね

ていた繁華街。夜の客で溢れたであろう一角は寂れて、崩壊寸前の木造建造物もある。一昨年に大きな料亭一棟を市に寄付してもらい解体撤去、今は広い空地になっている。「おかげで、雪が積もった時に除雪置き場として活用できています」と佐藤主幹。雪は一晩で腰の辺まで積もることもあるそうだ。

この繁華街を生かそうと若者たちのアイデアで映画の看板が設置されて、毎年夏には「夕張国際ファンタスティック映画祭」が開催されている。廃鉱した頃にリゾート開発するよりも、映画館や老舗料亭等の建造物保存に力を入れておけばよかったのにと残念である。

夕張を「課題先進地」のモデルに

「でばら」では5年前に、財政破たんして間もない夕張市を訪ね、東京都から派遣されて臨時職員として働く鈴木直道さんと、公園で草刈りをする若い都職員たち取材させてもらった。

当時鈴木さんは、市に残って何とかしたいと地域おこしをめざす市民グループや若者たちがいることに注目して連日会合に参加してアドバイス等をし、役所の仕事は夜帰庁してから一人黙々と行っていた。都庁へ帰っても売店でメロンを売って夕張をアピール、派遣任期が終了しても夕張に残って再生を支援した。

そんな鈴木さんの豊かな発想や行動力等が評価され、住民が市長になってくれと懇願、石原都知事(当時)にも肩を押されて立候補することになり、見事当選した。30歳、国内で最年少の市長として話題にもなったが、給与は都職員時代よりはるかに少なく、埼玉から

連れてきた新婚の奥さんも共働きしながら、相変わらず超多忙な日々を送っている。

市長室でお会いした鈴木市長は、夕張再生の企画や実務の中で、現場を見る、人と語る姿勢を貫き、一段と逞しくなったように見えた。「コンパクトシティ構想は他の自治体でも策定していますが、それらの多くは中心市街地を活性化するためのもので、人口減少に対応したプランは夕張が初めてだと思います。夕張は東京23区がすっぽり入るほどの広い面積の中に6地区の集落や市街地が広範に点在しています。今後10年かけて集落ごとにコンパクト化する、つまり中心部にある程度まとまって任んでもらうことです。さらに10年かけて鉄道や交通網の整備されている市の中心部に移って医療機関や商業施設も充実するという構想です。コンパクトシティの響きは良く、市民も基本的には賛成してくれませんが、将来は人が住めなくなる地域も出てくるわけで、住民の理解と合意を得るのは大変です。夕張は少子高齢化、現在まだ291億円の債務をかかえる等、世界も注目する「課題先進地」で



▲「コンパクトシティ構想」を語る鈴木直道市長「絆」と書かれた書画の前で



◀古い団地を撤去して平屋木造住宅55戸が新設された歩団地



▲明るくて暖かい住まいに大満足だと語る柳原さん
下は冬も往来が楽しい外廊下



▲手入れが行き届いて活用されている旧緑陽中学校。東京都の若手職員研修会場に

すが、似たような自治体は沢山ある。それらの課題にどう対応していくか、そのモデルとして取り組む覚悟です」と鈴木市長は語った。鈴木直道市長には最近講談社から出版された『夕張再生市長』という著書があり、その中で鈴木市長は、夕張では他地区のように手厚い住民サービスができないが、多くの市民が理解してくれること。子供たちは遠方から通学し新しい図書も購入できず最も財政破たんのしわ寄せを受けているが、夕張の未来を担う子供たちには「夕張に住みたい」と思ってもらいたい、そのための施策が大切なこと。月一度市長と高齢者が昼食を共にする席を設けているが、夕張の高齢者は「これこれをしてくれ」と言わず、「我々に手伝えることはないか」と言う、等々と書いている。市民への思いが印象的で、市長室には「絆」と書かれた書画が掲げられていた。

快適、安心——注目のニュー団地

コンパクトシティ構想を実現した実例である歩団地を訪ねてみた。近くには道の駅を兼ねた大きなショッピングセンターがある便利な

市街地で、250戸あった古い団地は撤去されて、広い平地に55戸（道営27戸含む）のモダンな平屋木造住宅が建っている。中央に集会所があり、各戸に小さな菜園もある。一棟に6世帯が住み、外廊下は屋根と間仕切りが施された広い回廊式で、風雪時でも散歩や交流ができる。自治会長の柳原清さん宅へ伺った。95歳、奥さんを数年前に亡くして一人暮らしだが、書道や詩吟教室の講師をし、マイカーで皆の買物も引き受けるなど生涯現役で活躍している。北海道産のカラマツ材を使用した新住宅は明るくて温かく木の香が漂う。3DKの広い間取りで、居間は南に大きな二重窓があるため一日中日差しを受けて暖かいという。「私は当初、団地の移住に反対でした。40年前のブロック住宅は風呂もなかったけど、住めば都、いさら引越しはご免だと老人たちは反対でした。でもやっぱり新居はいいねえ。私の人生で今年の冬は一番暖かくて快適でした」と言う。入居者の3分の2が独居老人だが、皆元気が出た。近くの道営住宅には若い家族が住んでいるので、子供たちにもよく会う。家賃は収入に応じて月1万円から4万円までのスライド式。「私は今27000円です

が5年後には4万円になる。他に各自の物置や駐車場もあるから安いですよ。釧路に住む娘や孫もよく訪ねてくるようになりました」。平成22年からはじまった市の市営住宅再編事業は、他に萌団地が102戸から32戸の新住宅へ、真谷地地区が252戸から72戸へ集約され、別の団地でも再編を予定している。廃校した小中学校の活用状況を見学するため、旧緑陽中学校を訪ねた。その日は年数回研修にくる東京都の若手職員10数人が3泊4日に来ていて、障害者のスポーツ普及体験教室を一日研修するという。昨夜同じホテルに宿泊していたが、実に折り目正しく意欲的に学ぶ姿勢が感じられた。障害者の自立支援事業やスポーツ普及活動は札幌市に本部がある北海道障害者スポーツ振興協会、NPO法人「あ・りーさだ」が市内の3つの廃校を活用して実施している。校舎は以前そのままよく手入れされており、子供たちの声が聞こえるよう。広い校庭はアウトドアスポーツに最適で、土日には市民が大勢活用している。隣接する旧緑小学校1階は、郵便局が開業する予定になっている。児童生徒はいなくなったが、自然エネルギーを活用した施設内農業、老人福祉施設、地域カフェ等、官民連携で活用する取り組みが進められている。これからの夕張市には目がはなせない、毎年来なくてはと実感する旅だった。

文／浅井登美子
写真／小林恵

▶内山分校跡地で五右衛門風呂を製作する内山さんと伊藤隊員



▲鳥帽子岳から望む日本有数のリアス式海岸・浅茅湾



▲島のいたるところに設置してある日本ミツバチの巣



▲隊員や関係者が一堂に会してミーティング会議
隊員は画像に示して説明する



教育文化の
発信

各分野の専門家が地域に根を張って 「対馬市島おこし協働隊」の活動

長崎県対馬市つしまし

少子高齢化で悩む市町村にとって「地域おこし協力隊員」の導入は必至。地域活性化のための企画や提案、集落の見回りや高齢者の支援等々、若者が減った地域にとって隊員の存在は大きく、そのまま集落に定住してほしいと願っている。そんな中で「生物多様性・森林・民間伝承保全」等をめざす対馬市では、自然環境問題等に専門的知識と経験を有し、地域づくりや島暮らしに関心を持つ人材を「島おこし協働隊」として受け入れている。平成23年に来島した1期生5名のうち4名が定住して活動を続け、現在2期生の女性隊員3名、3期生の男性隊員3名が専門性を生かした活動に取り組んでいる。地域や職場にお邪魔し、ある日の「コマ」取材させていただいた。

隊員は各部署に所属して活動

その日は市民協働・自然共生課が2カ月に一回行う「島おこし協働隊（以下協働隊と略）」の定例ミーティングが隊員と、隊員が所属する農林水産部、総合政策部観光交流商工課、上対馬振興部地域振興課の関係者を集めて開催された。各隊員からの報告と連絡のあとフリーディスカッションするもので、あらかじめ市民協働・自然共生課の糸瀬亜寿香主事が用意しておいてくれた資料と照合しながら、各人の報告や今後の予定に耳を傾けた。

資料から隊員の活動内容を概要すると、①生物多様性保全・南部担当／伊藤麻子さん（鳥取大学大学院卒）、②有害鳥獣ビジネスコーディネート／谷川ももこさん（日本大学卒）

◀細貝隊員と内山美津子さん
庭には捕獲処理したイノシシの皮が…



獣医師)、③民間伝承保全担当／細貝瑞季さん(京都大学大学院卒)、④島の食材プロフェッショナル／佐藤雄二さん(中央大学卒)、⑤島の森林再生チャレンジャー／吉富諒さん(慶応義塾大学大学院卒)、⑥島のタウンマネージャー／濱口義典さん(追手門学院大学卒)。

ほとんどの隊員が着任以前に対馬市には何度か来島しており、例えば伊藤さんはツシマヤマネコの生態調査で33回来島、細貝さんは「土着ミツバチ」を修士論文のテーマにして2度来島、谷川さんもヤマネコ保全と鳥獣被害調査等で14回対馬通いを続けてきた。ユニークなのは61歳の濱口隊員。ホテルや大型商業施設の開発等の仕事を経て長野県豊丘村他で地域おこし協力隊で活動、家族を大阪に残して、対馬市中心街の商業発展に尽くしたいと隊員を志願した。

ちなみに市民協働・自然共生課の糸瀬主事も平成25年10月より大阪市の企業を辞めて対馬市に職員として採用された。個性豊かな協働隊メンバー全体のマネジメントを担当しており、「彼女たちの人生の大事な3年間を対馬市のために費やしてもらおうので、市としても精一杯のフォローをしたい」と語る。

それにしても対馬市はとてつもなく広くて地域性も異なる。平成16年に6町が合併して誕生、その面積は709km²で、山林が89%を占め、原生林や、島々が複雑に入り組んだりアス式海岸、勇壮な断崖絶壁等があり、吉岐対馬国定公園に指定されている。国の天然記念物ツシマヤマネコをはじめ対馬固有の生物や大陸系の動植物が生息、渡り鳥の一大中継地としても知られる。朝鮮半島に最も近い地

理的条件下から大陸との貿易や交流も古く、今は韓国釜山との間に定期航路が運行され、年間18万人の旅行者が訪れている。

山里伝統の暮らしが息づく内山地区

翌朝、市民協働・自然共生課の小島繁樹主任の案内で、細貝瑞季隊員が懇意にしているという内山地区の内山美津子さんを訪ねた。田畑も多く林業も盛んな豊かな農村部だが、今は100人ほどになり、周辺が山林であるためにイノシシやシカの被害も多いそうので、内山さんの家の軒下には昨日ご主人が狩猟してきたイノシシが処理されてぶら下げてあった。血を抜いて肉は保存、いずれ皮もなめして活用するのだという。

「美津子さんは地元のことを教えてくださる先生で、皆のお母さんみたいな存在です」と細貝さんは言う。文化人類学を専攻し、対馬の伝統的な知恵や技術について聞き取りを行っている細貝さんにとって、様々な農作物を栽培して自給自足の生活を貫いている内山さんから学ぶものは大きいようだ。古い民家の居間には伝統的な手製人形や武芸品等が沢山並んでいる。内山さんは「若い人が訪ねてくると、自分も前向きに頑張ろうという気になります。知らない間に変わってしまった暮らしを見直す機会にもなるので大歓迎です」と語る。

家の前には自家製の農作物や加工品、保存食品を保管する物置や倉があり、その中から内山さんは伝統保存食品「せんだんご」の材料を見せてくれた。「せんだんご」は、サツマイモを細かく砕き、発酵、浸漬、乾燥等を

繰り返してデンプン質を取り出したものを、さらに「鼻高団子」と呼ばれる形に丸めたり乾燥させた対馬独自の保存食である。「千の手間がかかるので『セン』と呼ばれる」という説もある。小麦粉にない独特の食感がある。

続いて訪ねたのが近くの丘の上にある旧内山小学校分校。ここは伊藤麻子さんの活動フィールドで、廃校を地域住民や子どもたちの交流の場にしたと草木染教室等を開いていた。いま完成間近な作品が、地元でUターンして農業をしている内山副武さん(70)の指導で製作してきた五右衛門風呂。石の目が読めるという副武さんは、周りにある石を切断し、積み上げて風呂を作り、火入れをする段階に至るまで指導してくれた。佐賀県の大手工務店で働いてきた大工の達人で、野外活動用の窯や廃校の水回り、排水施設も手作りしてくるありがたい存在だ。

「この学校は昭和27年に地元の人が総出で校庭や校舎前に石垣を築いたんです。私の学んだ頃は在校生が85名はいた。校舎も手入れすれば十分使えるので、何とか残して活用したい」と副武さん。伊藤さんは「ここには可能性がいっぱいあるので、青少年や都市から来る人の体験宿泊施設にしたい、私も結婚して生涯住みたい場所です」



◀廃校となった内山分校の校庭で。「住民総出で石垣を積んだ」と語る内山副武さん

▶ 厳原市街地、川端通りを歩いて語るタウンマネージャーの濱口隊員。▼ その日も韓国からのツアー客が来て市内の神社見学に出かける



と語っていた。

伊藤さんが考えていることを夢物語で終わらせず、校舎を魅力ある交流施設に再生・活用していくためには、地元住民の熱意を結集して市や民間機関に働きかけていくことも必

要と思われる。とりあえずは、五右衛門風呂に入って満天の星を眺める会を開催することになるだろう。

対馬の商工業を発展するために

対馬市のメイン繁華街は、博多や釜山を往來する船の玄関口である厳原港や対馬市役所、対馬物産館がある厳原町の市街地。県道沿いには公共施設や商業施設、山沿いには歴史のある神社や寺が建ち並び、韓国からの観光客が必ず参拝する万松院、八幡宮、国分寺等もある。県道を一步入ると国道382号線沿いの川沿いに木々が茂るお洒落な遊歩道があり、物産や貴金属を扱う専門店や飲食店、ホテル等が軒を連ねている。しかし利用客が多いとは言えず、一步路地に入るとシャッターを下ろした店舗が目につく。タウンマネージャーとして9月に移住してきた濱口義典さんにとって、この繁華街の活性化と再生をどう提案していくかが重要テーマになっている。

「まちが整備に力を入れてきた川端通りが、今は韓国からの観光客でようやく維持している。しかし、彼ら旅行者が地元の方と気軽に交流できるような場所がほとんどありません。私は韓国からの観光客18万人こそが、他所にない対馬の魅力、プラス材料と考えて、新たなサービスのや街作りを提案したいと思っています」と濱口さんは言う。

川端通りを入った路地は店を畳んでシャッターを下ろした家々が目につく。「商売はしなくてもシャッターは上げて、ここには暮らしたが息づいていることを感じさせたい。私ひとりの力は限られています、毎日散歩をし

て住民と親しくなり、活気を取り戻すための方策を一緒に考えていきたいと思っています。若者や旅行者が利用できる娯楽施設や気軽に入る店、対馬ならではの伝統品や農産物売る店舗も少ない」と濱口さん。県道沿いに大規模な商業施設が出来た影響もありそうだが、「全体としておもてなしの心が足りないのでは」と指摘していた。

対馬の食材に関する調査や取材、情報発信、商品開発に取り組んでいるのが島の食材プロフェッショナルの佐藤雄二隊員。ミーティングでは活動の報告や今後の予定等を写真入りでまとめてプリントしてきた。その日は(一社)対馬観光物産協会でパソコンに向かっていたが、地酒やせんだんご製造の現場訪問や、郷土料理家への聞き取り等、製造現場を訪ねて職人さんと交流することに力を入れている。「ろくべえや赤米等、対馬独自の食文化に関心があります。商品開発のほかに、販路拡大や観光誘客増加も検討していきたいと思います」という。

なお、島の森林再生チャレンジャーとして7月より協働隊で働く吉富さんはNPO法人フードデザイン・ネットワーク理事等の役職もあり、会議の席では神奈川県川崎市や藤沢市にオープンした人気の店舗(書籍や食品を扱うブースやカフェ等を併設した店舗)を



◀ 観光物産協会に所属して、商品開発や販売拡大等を研究する佐藤隊員

紹介、その日も東京へ食材PRに出かけて不在だった。長崎県の地域力向上支援事業で対馬には何度も足を運んでおり、森林の育成や活用への提案が期待される。

有害鳥獣対策と資源活用に向き合う

最後に紹介したい協働隊員は、獣医師の資格を持ち、学生時代に取得した罫の狩猟免許に加え、対馬に来て銃の免許も取得した谷川ももこさん。野生動物問題に関心を持ち、学生時代は丹沢や対馬の山林に通って調査やボランティア活動を続けてきた。そんなとき、彼女のやりたい仕事と一致するような対馬市の協働隊募集（有害鳥獣ビジネスコーディネーター）があり、応募を決意。今期、着任2年目、イノシシやシカの効果的な捕獲方法や肉や皮の資源活用化にむけた実践活動が続いている。

島では鳥獣対策として防護柵を耕作地に設置、その面積は約900kmに及ぶ。猟友会が年間1万頭のイノシシやシカを捕獲しているが、それでも農作物の被害が後を絶たないという。猟友会の活動と捕獲方法を学ぶため、

谷川さんは狩猟免許を取得、猟銃も所持して、猟友会員たちと山にも入った。自ら現場をよく把握して具体的な対応策を講じるという行動派である。

農林水産部で谷川さんが試作品として制作した皮革製品を見せて



▲有害鳥獣対策用に、イノシシやシカ皮を使ってレザークラフトの開発に取り組む谷川隊員と試作品

▼ウイナーソーセージを製造する谷川隊員(左)と仲間の女性たち



もらった。「イノシシの皮は厚くて丈夫なのでブックカバーなどに適しており、シカ皮は柔軟で肌触りがよく加工しやすい。地域の問題を学ぶきっかけとして、学校の生徒たちがペンケースや財布等を作るレザークラフト教室の取り組みも始まっています。資源になることで多くの市民が有害鳥獣対策に関わってくれたら」と谷川さんは言う。

午後から鳥獣肉を食用に活用するための解体処理加工施設を特別に見学させてもらった。加志地区は昔から畜産が盛んで、かつてはシカを飼育して角を漢方として販売するための施設があったが、平成7年から平成10年の3年で廃業となった。その施設を今年の秋に市が改装し、肉の運搬に必要な冷凍・冷蔵車も購入した。谷川さんは来島以来、鳥獣肉の加工を研究し、日本各地へ視察に出かけ、今年ようやく商品となるものができそうなどころまできた。

その商品のひとつが生ソーセージだ。イノシシやシカ肉をミンチ状とし、脂身を加えて入念に練りあげ、それを機器を使って腸詰めにしていく。たちまち見事な生ウイナーソー

ーセージが出来上がった。マスク越しに三人は微笑み、形よくできたウイナーを手にとって完成を確かめた。マスクを外した谷川さんも「これをお世話になった人たちに届けます」と嬉しそうだ。

見学に来た農林水産部の梅野加寿人さんは「さすが努力を惜しまない谷川さん。頼もしい助っ人です」と言っていた。

文/浅井登美子
写真/小林恵



◀シカ肉等の加工を支援する農林水産部の梅野さん。後ろが改装した加工所の建物

▶夕方には町は高校生でにぎわう。
学習センターの先生と語る生徒たち



▲菱浦港の山の上に建つ島前高校の校舎や体育館



▲昼休みの2年生の教室



教育文化の
発信

自然と地域の中で輝いて学ぶ 「島留留学」

島根県立隠岐島前高校
おきどうぜん

島根県海士町
あまちよう

海士町にある島根県立隠岐島前高校がいま全国から注目されている。生徒数の減少で廃校の危機にあったが、「島留留学」が次第に人気を呼び、平成20年に86名だった生徒数は26年には156名になった。その4割強が関東や関西など各地から留学してきた生徒たち。学力の向上で、卒業生39名中13名が国公立大学に合格、早慶などの難関私立大学へも進学している（平成25年度）。海や自然と親しみ、地域活性化の一翼を担いながら、充実した学習生活を送っている生徒たち取材した。

高校は隠岐の若者 教育のシンボル

松江市七類港から3時間半、フェリーはほぼ満員の乗客を乗せて海士町菱浦港へ午後1時近くに到着した。あいにくの風

雨で海上は荒れたが、知夫島を西側に、海士町東部先端の木路ヶ埼灯台を東側に見ながら湾に入る頃には、海は穏やかに雨も上がった。フェリーが菱浦港に近付くにつれて、丘の上に大きな建物群が見えてきた。島根県立隠岐島前高校の校舎、体育館、寮等である。港から徒歩10分程度という便利な高台にあり、その堂々たる存在感は、隠岐の島3町村（海士町、西ノ島町、知夫村）が、ここに若者たちの教育の拠点を開設し運営してきたという強い意志と歴史が感じられる。

菱浦港は近代的に整備され、海士町の窓口や観光協会がある。港前の主要な建物は環境を配慮して落ち着いた建造物に統一され、集落の家々も手入れが行き届き、漁港のイメージはない。月曜日から、港広場は海士町へ仕事にきた人々で賑わい、昨日は県内高校の体育行事に参加してきたという女子高校生らが、足早に学校へ向かっていった。

港前の路地から木々が鬱蒼と茂る道を上っていくと丘の上に島前高校の3階建て校舎が現れた。手前にレスリング部専用の体育館があり、その先には広大な校庭と瀟洒な寮がある。事務室側の玄関に



◀常松校長先生

入ると、昼休みが終わって午後の授業が始まる前のようで、生徒や先生があわただしく廊下を行き交っている。

まず驚かされたのは、我々を見ると生徒が「こんにちは」と元気に挨拶をしていくこと。職員室を出入りする先生方もていねいに挨拶をして通り過ぎていく。みな若い。間もなく事務局の男性が来て、校長室へ案内してくれた。「今年4月に大社高校から赴任してきました」と言っただけで常松徹校長は、学校案内と概要を記した資料を手渡してくれた。

常松校長は、平成13年度から15年度までの三年間島前高校で日本史の教師として教鞭をとっていたそうで、当時はまだ180名を超える生徒がいたが、その後年々島の少子過疎化で生徒数も減少し、平成20年には89名になつてしまった。

隠岐島前高校は昭和30年に島根県立隠岐高校島前分校（定時制）として開校したが、33年に全国初の全日制分校に改組、さらに昭和40年に普通科各学年2クラスを有する隠岐島前高校になった。平成に入ると寄宿舎の新築移転、格技（レスリング）場や屋内運動場を竣工する等、設備の整備にも力を入れてきたが、平成20年には生徒数の減少で各学年とも1クラスになった。

このままでは廃校に追い込まれてしまう。そんな危機感から、島前高校を何とかしようと、22年に始まったのが「島前高校魅力化プロジェクト」だった。地球的視野を持ちながら足元から持続可能な地域社会を作るグローバル人材の育成、生徒が地域課題等に取り組みプロジェクト学習、学校と地域が連携した

公立塾「隠岐國学習センター」の創設、全国から多彩な生徒を受け入れ学校に異文化や多様性を取り入れる「島留学」などの施策を3町村、学校、地域住民、各種団体が丸とらえて総力をあげて開始した。

その成果は直ちに反映され、24年には島留学してくる生徒が21名加わり、1年生は2クラスになり、26年には全学年2クラス化が実現した。

なぜ隠岐島前高校が魅力あるのか、都市からわざわざ留学してくるのか。「どきどききらきら 島留学」という学校紹介書の巻頭に書かれた一文。

「隠岐島前には都市が失ってしまった自然が、6000人の島民の人情と心温かい支えが、画期的な地域おこしの活動があります。みんな一人ひとりが主役です。海と山を楽しみ、地域で学び、汗を流し、手厚いサポートのもとで、大学進学のための勉強にも励みます。自立した高校生活をあなたに。『島留学』にようこそ！」

常松校長は、「今年5月現在、全校生徒は156名。71名が島外から、59名が県外からの留学生です。県外では東京、大阪、兵庫等の大都市から来た生徒が多く、遠くは北が岩手県、南は大分県からも留学してきています。皆、意欲を持ち、目的意識を持って来ている。自分のしたいことを探すために来たという子もいます。島留学をしてきた生徒は特に島の自然や暮らしに関心を持つようです」と語る。「私はグローバル人材の育成と言っています。島は人口減少・少子高齢化や財政難といった課題を持つ社会の縮図です。島でその課題解

決型の学習をしてこれからの社会の持続発展を推進するために何が出来るかを学ぶことです。若者たちが世界的視野を持つこと、夢を持つこと。そのための独自科目や企業や大学等との交流等沢山のプログラムがあります。今年から修学旅行はシンガポールへ出かけ、そのプレゼンを生徒は英語で行うことにしました」

マスコミにも取り上げられて全国からの見学希望が増え、その対応に多忙なのが若林牧彦教頭先生。その日も島外から留学を希望して見学に来た親子3人に校内を案内していた。壁に25年度卒業生の大学進学状況が張り出している。島根大学、広島大学、金沢大学等の国立大学への合格者は13名、ほかに慶応義塾、早稲田、法政大等の有名私立大学への合格者が10数名。「卒業生39名中これだけ大学



▲▶数々の実績を持つレスリング部と格技体育館
屋休みに体育館に集合してもらい記念撮影した



◀部員手創りの「ヒトツナギ」のポスター

進学を達成している、凄いことです。進学後も海外経験をする、被災地や僻地へ行って活動するなど、各地で意欲的に活動しています。当校はいわゆる受験校ではありません、生徒が自主的に学ぶことを楽しみ習慣づけているということなんです」と若松先生は両親に説明する。島前高校への問い合わせや入学希望者が増えているが、島留学は入学定員の3割と定められている。そのため最近では親子で移住してくる教育移住もあり、偏差値がかなり高くなっているようだ。

教職員数は29名、事務職員が3名、芸術科非常職員が3名で、首都圏から希望して赴任してきた先生もいる。その他に県派遣の社会教育主事と5名の魅力化コーディネーターも。

部活動も一生懸命

翌々日から期末試験が始まることになってしたが、昼休みにお願ひしてレスリング部の生徒たちに格技体育館に集まってもらった。同校のレスリング部は県総体で常に優勝、インターハイにも毎年連続出場する強豪。レスリングは隠岐の島の子供たちが昔から親しんできたスポーツで、島前高校が誇るクラブ活動の一つだった。そのため、平成6年に専用道場を開設した。体操機器も整っており、夜間に来て利用する一般人もいる。

高校生は入学してきてから始める生徒が大半だというが、男女共毎日厳しい練習を重ねて、全国大会出場を勝ち取っている。他にも各スポーツ部があり、軟式野球同好会、ソフトテニス部が県大会等で活躍している。

さらにユニークなクラブに「ヒトツナギ部」

という部がある。島の中高校生と島外の中高校生が10人ずつ参加して4泊5日で島前3島の各地を見学したり島の生活を体験するもので、5年前からはじまった。「人の優しさや繋がりの大切さを提案したい」と企画した女子生徒は島外からの留学生。第一回観光甲子園でグランプリを受賞した。以来部活動として継続的に実施し、それが縁で島前高校に入学してきたという生徒もいる。

隠岐は移住者受け入れの先進地

島留学が短期間で成果を上げているその背景には、隠岐島には移住者受け入れを10数年前から積極的に行ってきた先進地としての実績がある。漁業を担う若者たちを島外から受け入れて、島で豊かに生活してもらおうと体験移住を呼びかけた。島にインターンして公営住宅や改装した空き家等に住み、月給制で漁業や農工商関係に従事するという若い家族、セカンドライフを島で楽しみたいという定年世帯等が増えてきた。

住民たちの島外の人を歓迎する風土と行政のきめ細かい対応。その結果、島へインターンした人たちによる新事業や新企画の提案が、地域発展の起爆剤になっている。

島前高校の新たなプロジェクトの立ち上げでは岩本悠さんの存在が大きい。ソニーで人材育成をしていた岩本悠さん(35)は7年前に東京からインターン、「これまで志(こころ)を果たす場所は常に都会だったが、これからは若者が地方の課題に挑戦する時代だ」と若者教育の大切さを語り、島前高校のPRを手がけている。

海士町で企画会社「巡りの輪」を起業した



寮の本日のメニューはカレーとメンチカツ等



阿部裕志さん(36)は町の農漁業者らを講師に大手企業の社員らを島に呼んで研修会を開き、地場産品のブランド化を手がけた。種苗生産から養殖、販売までを一元管理する漁業の取り組み等で、この10年で4000人を超す若者たちが移住、現在人口2353人、1163世帯が暮らす町になっている。

島前高校に関して町では、学習センターの教科指導スタッフの給与、入寮生の寮費助成、生徒が里帰りする費用の半額(上限3万円)を町が負担する等を行っている。リーダーたちの給与をカットし、国県等からの助成制度を最大限活用している凄腕リーダーが海士町山内道雄町長。島前高校関連の事業費にも過疎対策事業債を充当する等の工夫をしている。

夜はほぼ全員の生徒が街の「寺小屋」へ

夕方島留学する生徒が住む鏡浦寮へ伺った。校庭の先、校舎まで徒歩3分の安全安心な場所にある木造2階建ての施設で、現在64名が



▶夕食を終えたと街の学習センターへ出かける

寮。寮生は最大4人一部屋で集団生活を送っているとのことだが、玄関を入ると廊下脇に自習室が10教室あり、主として3年生が受験勉強に使っているらしい。寮の手前には間もなくオーブン予定の交流センターが最後の仕上げ工事を行っている。訪ねてきた保護者や学校関係者が宿泊・交流する施設だという。

厨房では3人の炊事員が夕食の調理を終えて後片付けに追われていた。広い食堂のテーブルには特大鍋にたっぷり入ったカレーが置かれ、隣には大量のメンチカツや野菜サラダが並ぶ。食器や茶をいれたヤカン等を点検しながら、「本当は出来たての熱々を食べてもらいたいのですが、生徒の食事時間はまちまち。早い子は5時、遅い子は学習センターから帰って10時頃食事しています」と炊事員の女性が語る。

厨房では朝食に加えて、昼食用の弁当も70食分を用意するそうで、お弁当は学校から先生が取りに来るといふ。さらに土日は、以前は生徒が厨房に入って調理していたが、食中毒等が発生しては心配だと、炊事員が平日通り3食分を用意するようになった。

厨房で働く女性たちの大変さが伝わってくるようだが、それに応えるように、生徒たちは「寮の食事はメニューもたくさんあって美味しい」といいながら、元気でお代わりして食べていた。

話が弾む一年生女子のグループ。一人は東京都青ヶ島から、もう一人は宇都宮市から来たと言いつつ「毎日が楽しい」「ホームシックは全然ない」と言う。別のテーブルでは三年生の男子たちが食事中。群馬県草津市から留学し

てきたという生徒は「ヒトツナギに参加して隠岐が気に入って留学した」と言っていた。一年生から島留学してきた彼らは大学受験を控えて勉強中で、「期末試験もあるので、今日は学習センターへは行かない」と言っていた。夕食が終わると女子生徒たちは三々五々に街へ降りていった。3カ所ある寺小屋「隠岐国学習センター」へ向かう。街中では地域のお年寄りや生徒たちが、孫と祖父母のように楽しそうに語る姿が見られた。

学習センターは、島に学習塾がないことから、学校と連携して補習授業をしたり、生徒が自立学習する公営塾として町が平成22年に開設した。約110名が登録しており、指導員は10名ほどいる。一年生は地区センターのホールを使用しているが、二、三年生は一般の民家を借りている。二年生の学ぶ民家を訪ねると、二部屋にテーブルがところ狭しと並べられ、6時前なのに席はいっぱいで、ノートを開いている生徒、パソコンをやっている生徒とさまざま。二人の若い指導員が忙しそうに飛び回っていた。三年生が学ぶ教室も民家を活用、襖を外した広い和室にはクロスを張ってテーブルを設置している。的場陽子指導員が部屋を温めて準備していた。指導員になった経由を聞くと、ベネッセの高校生を対象にした教材作りをしていたが、現場で生徒たちに直に触れたいと2年前に兵庫から1ターインしてきたという。島根県が募集した「島根暮らし」の職員でもある。生徒たちの印象は「みんな素直で、よく勉強し、何かしたいと意欲的な生徒が多いですね。すでに大学へ推薦入学が決まった子も多く、就職でも企業

から沢山声がかかっています」と言っていた。午後10時、学習センターの終了時間である。生徒たちは仲間や指導員らと別れを惜しむように教室から出てきた。船に乗って西ノ島へ帰るために港へ駆け出していく生徒たちもいる。夜も更けて冷えてきたが、寮生たちは元気に喋りながら丘を登っていった。家々の灯は消えたが、港や路地のライトは灯って帰路を急ぐ生徒たちを見送っている。波に揺らめく灯は美しく涙ぐむようにも感じられた。



▲3年生用に借りた民家の一階



▼夕方から満員、2年生の学習センター

▼午後10時、塾を終えて帰路へ急ぐ生徒たち



文／浅井登美子 写真／小林恵

●島根県立隠岐島前高校
☎08514-2-0731
●隠岐国学習センター
☎08514-2-0310



教育文化の発信

島まるごと図書館プロジェクト 身近に本があり、会話が弾む町に 島根県海士町

「図書館のない島」というハンデ
イキャップを逆に生かして島の
保育園から高校、地区公民館・
港等の人の集まる場所12カ所に
図書分館を設けて、島全体を一つの図書館とし
て文化教育の振興に当たってきた海士町。平成
22年10月にはあまり活用されていなかった学校
図書館をリニューアルして海士町中央図書館が
開館。人がいる場所には本がある「島まるごと
図書館」プロジェクトは持続しており、本好き
にはたまらない町である。

海士町の「島まるごと図書館構想」は平成
19年に始まり、町内の保育園、小中学校、高
校へミニ図書館を設置、学校司書を配置した。

子どもたちがいるのかと驚かされた。
各教室には年齢に応じた図書コーナーがあ
り、特に上級生たちの教室廊下には絵本がぎ
つしり並ぶ。子どもたちは慣れた様子で、昼
食前の自由時間に読書を楽しんでいる。これ
らとは別に、玄関前にも中央図書館から配本
された新刊の児童書コーナーがあり、さらに
子供を迎えに来たお母さんが気軽に子供と読
む本や主婦向け図書を手にできるコーナーも
あり、図書を有効活用するための工夫が随所
に感じられた。



▲下駄箱の上にもお持ち帰り自由な雑誌や本がある



▲玄関先にある新刊書を中心にした児童図書コーナー

身近にいつも沢山の本がある
ことで、子供たちの読書が増
え、平成21年には海士小学校
が、23年には福井小学校が、
「子どもの読書活動優秀実践
校」として文部科学大臣賞を
受賞した。

子どもの読書風景を見た
と海士町教育委員会中央図書
館主任の磯谷奈緒子さんにお
願ひして社団法人の保育園へ
お邪魔した。

美しい自然公園の中に建つ
保育園には何と幼児から小学
校就学前の5、6歳児まで80
名が在園していて、島になぜ
こんなになくさんの元気な子



平成22年に中央公民館に増築された中央図
書館は、広さ200㎡に蔵書2万5000冊
をもつ本格的な図書館で、3名の専任職員、
2名の非常勤らが勤務。カフェコーナーやテ
ラス席のほかに、子供図書コーナーには炬燵
のある読書室もあり、老人が孫と絵本を読ん
でいた。読書のほかに、交流、寛ぎの場にも
なっているようで、年間入館者は7370人
で貸出し冊数は1万403冊(25年度)。平成
15年に比べると8.7倍だという。「ただ利用
者はU・Iターンの人に多く、地元住民の方に
もっと利用してもらおうのが
課題です」と磯谷さん。入
口には若者が読んでほしい
本や話題の図書がお洒落に
何気なく置かれていて、高
校生や若者へのアピールが
感じられた。

文/浅井登美子 写真/小林恵



上/磯谷図書館主任(左)と常連の母子さん
下/木の香と田園の風が流れる中央図書館内部

●海士町教育委員会中央図書館
☎08514-2-1221

学生の提案をビジネスに生かす

十日町市ビジネスコンテスト「トオコン」新潟県十日町市

とおかまらし

産官学連携推進事業として、県内および全国の大学生が十日町のビジネスや新しい地域作りを提案する十日町市のビジネスコンテスト「トオコン」は、平成22年から始まり、採用された企画のいくつかが市内の企業で商品化されてきた。第5回を迎えた「トオコン」本選会には予選会を勝ち抜いてきた6校に地元の高校1校がゲスト参加して、12月20日十日町市クロスステンで開催された。

これまでに25大学、118チームが応募

大学のない十日町市では、産官学連携で地域の新しい可能性や産業の創出を模索したいと、平成22年度より大学生を対象にした「ビジネスコンテスト」をはじめた。「よそ者」で「若者」である大学生が、十日町の資源や良さ、魅力を再発掘し、それを生かして新ビ

ジネスの創造と経済の活性化をめざすための提案をするのが目的。毎年7月に募集テーマを決めて募集を開始、8月に現地視察会を実施する。以後は大学生が独自に現地調査や見学を行って、企画と商品制作を手掛ける。

今年でコンテストで入選、事業化したものには、十葉町スイツグランプリ(新潟産業大学)、着物ドレスのリメイク販売(長岡大学、首都圏大学情報拡散事業 早稲田大学)、ピクニックコンサート事業(東京家政大学他)、十日町市カタログギフト事業(東京農工大学)、十日町の着物生地を使ったスマホカバー「ス日和」(十日町高校)がある。「トオコン」最優秀賞には賞金7万円を送り、また市内の企業が事業化した場合は、最大で経費の4分の3・上限150万円を補助している。

今年の募集テーマは「わたしがやりたい！十日町ビジネス」。9月下旬に募集を締め切り、10月中旬に15チームが参加して新潟と東京で



予選会を開催、予選会をクリアした6チームが12月20日十日町市クロスステンでの本選会に望んだ。

商品を試作して望むチームも

今冬は全国的に寒波が早く訪れ、12月半ばなのに十日町にも2m近い雪が降った。本選会の日には比較的暖かく小雨模様で、積雪も1m30cmほどになり、会場までは除雪も行き届き、クロスステンホールのある「道の駅」は買

い物客で賑わっている。会場の2階には、中央に舞台があり、その前に市商工関係者、学識者ら7名の審査委員、その後ろに会場審査委員が列席、参加大学関係者や報道関係者も一堂に会して、午後1時に開会した。

同会の主催者で審査委員長の関口芳史市長が、会の趣旨や今までの成果を述べた後、早速6大学のグループが各15分の時間で発表を

▶1階には十日町特産の織物展示室と和菓子や蕎麦等の特産品販売コーナーがある



▲「トオコン」会場のクロスステン。
▼審査員席の並び会場



▲挨拶をする関口芳史市長





▲「米粉めんが被災・アレルギー一人を救う」を提案する長岡大学松本ゼミの学生。米粉で作ったラーメンも配られた



▲千葉工業大学「TKG～十日町ご飯～」。缶に入ったご飯とおかずが発熱パッチ等であつあつになると説明する
▼東洋大と法政大の同級生が十日町に外国人旅行者を呼ぶための提案をする



▲新潟産業大学金ゼミの「十日町を聖火の町へ～あいあいハンカチ付き縄文クッキー」
▲美味しそうなクッキーを用意してきた



行った。

トップは千葉工業大学遠山研究室の「TKG～十日町ご飯～」。ご飯とおかずの入った缶詰を発熱キット等で加熱して温かいご飯が食べられるというアイデア。夜中も研究室で仕事する理工学部の学生にこんな缶詰の自動販売機があつたらいいなと思って開発したという。それに対して審査委員から「非常食はどの市町村でも必ず持たねばならず、マーケットは必ずある。そこに十日町色を出しても

らいたい」「食材をそのまま入れるのではなく、出来上がったものを入れる方がよい」等の意見が出た。

続いて長岡大学松本ゼミの「米粉めんが被災・アレルギーを持つ人の分析と、十日町の米粉100%を使った食品の提案。米粉はパンや饅頭、うどん等で使われているが、ラーメンには使われなかったと試作品を用意した。審査員は「農家は米を作っても売る方は不得

意なので、今後の課題にしていきたい」と語り、十日町としての特殊性は感じられなかったものの、高く評価した。

3番目は、東洋大学と法政大学に学ぶ二人の同級生による「TOSTA.web」。外国人を積極的に受け入れるために、ウェブサイトを制作する、旅行者の仲介・送迎、外国人向けゲストハウスやカフェの設置、海外の訪日旅行社との提携等5つの方法で外国人を受け入れようと提案した。「旅行者が多いのは韓国、中国、台湾。ヨーロッパの個人客をどう呼べるか」「語学をどうするか」「ビジネスに結びつくか」等の意見が出された。

休憩をいれて4番目は新潟産業大学経済学部金ゼミによる「十日町を聖火の町へ——あいあいハンカチ付き縄文クッキー」。モンゴルから留学する男子学生1名も参加したグループで、十日町から出土した国宝火焰型土器（縄文土器）を2020年の東京オリンピックの聖火台のデザインに採用しようという動きに賛同、縄文クッキーと縄文土器ハンカチを組み合わせた商品を提案した。クッキーは豆入り、オーツ麦入り等を（株）ブルボンの協力を得て制作した。「実現性のある商品なので、市内の企業と連携して取り組んでもらいたい」と好評だった。

5番目は法政大学Revainという男性2名の「赤ちゃん服×着物プロジェクト」。市内の神社と提携して着物生地を使った赤ちゃん服に成長を祈る願掛けをして販売するという、十日町の着物生地をベビー用品化するアイデア。十日町服飾専門学校との協力を得て、着物生地をロンパースを制作してきた。ロンパースと



▲長岡造形大学チーム冬生まれの「十日町フォトタクシービジネス」提案。イラストと図面で説明



▲法政大学Revaiz「赤ちゃん服×着物プロジェクト」。下は着物生地で作したロンパース



▲十日町高校の「火焔型土器発信プロジェクト」の発表と制作した火焔型饅頭(左)

神社の願掛け証明書を桐箱に納めて6500円ほどで販売したいそうで、会場は笑いにあふれた。

ラストは長岡造形大学冬生まれという女子大生5人の提案する「十日町フォトタクシービジネス」。十日町には美しい景観や「大地の芸術祭」を見に県外から多くの観光客やアマチュアカメラマンがやってくる。田舎の慣れない道や観光地をタクシー利用でまわり、タクシーにはレンタルのカメラ機材を用意す

る等を提案。女子大生らの計画では一回1万8000円とかなり高額なタクシー代が算出されたが、観光客が何人かで利用したり、予約制で宿泊施設等と提携する等の工夫をすれば、利用者は増えそうだ。

さらに番外で、昨年着物生地でスマホカバーを作る提案で話題になった十日町高校。今年度は2年1組が「火焔型土器の饅頭を販売する」提案を行った。同高校では「トオコン」へチャレンジする「チャレンジ！トオコン」

という授業もある。今回は火焔型土器の饅頭の模型を制作して、美しいパッケージ入りで持参した。「若い人がクッキーでなく饅頭を作ったのが嬉しい」と審査員の一人が語った。

午後4時半を回って26年度のトオコン発表会は終了。別席で審査委員が審議した結果、最優秀賞に法政大学の「赤ちゃん服」と長岡造形大学「フォトタクシービジネス」の2つの提案が選ばれた。

総評で関口市長は、「十日町のいいところや我々が気付かなかったところを皆さんから知る機会となった。今後の方向性を捉えたプランはできるだけ実現するように我々も応援したい」と述べた。

なお、今回で5回目を数える「トオコン」事業は今年度で一区切りとし、来年度以降は若者らの起業支援を目的としたバージョン2として開催していくそうである。

「道の駅」は十日町市の特産品を展示販売するお洒落な物産館で、伝統を誇る織物展示室もある。閉店時間になってしまったため織物は見学できなかったが、大急ぎで念願の十日町蕎麦や蕎麦饅頭等を購入した。年越し蕎麦として満足したことは言うまでもない。

文/浅井登美子 写真/小林恵



▶最優秀賞を受賞し、市長より表彰を受ける法政大学と長岡造形大学の学生

●十日町市産業観光部産業政策課 ☎025-757-3139
http://www.toocon.jp



暮らしの知恵を
次世代へ

風土に合った「小さな農業」の創出

「チャレンジ農業実践塾」ふながたまち 山形県舟形町

国宝「縄文の女神」が出土した地として知られる山形県舟形町。この町で6年前から続けられている農業の新たな挑戦は、「小さな農業」の創出だ。高齢化率が県内上位、日照率が低く、県内有数の豪雪地帯と言われる舟形町。その中でスタートしたが、大規模でもなく集約化でもない「知恵を集めた農業」。「チャレンジ農業実践塾」に取り組み意欲的な農家の皆さんと指導に当たる山川先生を取材した。

美しくも厳しい自然の中で 新たな農業を

奥羽山脈と出羽丘陵に抱かれ、山形の母なる川最上川と鮎の宝庫として知られる清流最上小国川が大地を潤す。山形県北に位置する舟形町は東北らしい懐深い自然に恵まれている。この豊かな自然の恵みを活かして行われる農業の中心は稲作。町内には、清らかな堰に囲まれた美田が並ぶ。しかし、目に映るほど



▼おかひじきの種。自家採種している



▼放し飼いで健康に育つやまがた地鶏



▼出荷までに7年かかる行者にんにく



この地での農業は楽なものではないという。舟形町では、稲作のほかニラ、ネギ、きゅうり、アスパラなどの園芸作物も栽培されているが、農用地の多くは中山間地が占めるために作業効率が悪く、作れる作物も限られているのが現状だ。

また、舟形町から少し南の村山地方では果樹栽培が盛んに行われているのだが、舟形町のある最上郡は日照率が低く、果樹栽培には向かない土地とされてきた。さらに雪の多さもこの地の特徴。積雪は例年1mを超え、多い年には2m以上となる県内有数の豪雪地帯で、長い冬は農閑期とされてきた。

加えて担い手不足の問題も抱える。町内の人口5899人のうち65歳以上の人口は1999人となり、高齢化率33・9%となっている。県内では高齢化が進んだ市町村の一つでもある（平成26年9月時点）。

当然、後継者や新規就農者の確保は困難と

▲倶楽部員のハウスを見学する佐藤夫妻と山川先生、産業振興課の皆さん

▼おかひじきの跡に栽培している葉もの



▶おかひじき倶楽部の三浦さんと山川先生



言える。
こうしたいくつもの悪条件が重なった結果、舟形町の8割以上の農家の年間販売額は、約300万円未満。「農業で食べていく」ためには、なかなか難しい数字だろう。
こうした問題を少しでも改善しようと舟形町で平成20年に立ち上げられたのが「活気あふれる農業推進機構」だ。機構のテーマとなつたのは、「安心安全、良質な農産物を提供す

るために生産から加工・販売まで一貫した体制を確立し、潤いと活気ある農村地域を形成する」というもの。この目標を具現化するために機構内に、意欲的な農業従事者が参加する「チャレンジ農業実践塾」を設置。各分野に精通した指導員を置き、これまでの舟形町では実現が難しかった主体的な農業をめざすことになった。

風土に合った農業の創出

チャレンジ農業実践塾（以下、実践塾）が発足して6年。この期間を振り返って「試行錯誤の連続で進めてきましたが、確実に成果が実りつつあります」と語ってくれたのは、舟形町産業振興課の岡崎千恵子さん。実践塾の活動をバックアップしてきた一人だ。

岡崎さんによると、実践塾の具体的な目標として、発足当初から掲げられたのは、農業所得の引き上げ。その数字を500万円以上と定め、この数字に近づくために舟形町の気候風土に適した新たな特産品づくりが進められてきた。

その結果、軌道に乗ってきたのが「おかひじき」、「行者にんにく」「やまがた地鶏」の3種類だという。

「これらの3種類については、それぞれ生産者グループも結成され、生産だけではなく、独自の販路開拓も含めた取り組みが進められています。もちろん、全員が目標額をクリアするには至りませんが、これまでの舟形町にはなかった取り組みとして期待されています」と岡崎さんは話す。今回はこの岡崎さんの案内で、それぞれの生産現場を訪ねること

になった。

規模拡大よりも 付加価値の高いものを

まず伺ったのは、「おかひじき栽培倶楽部」の三浦さん。6名の会員で切磋琢磨しながら日本の伝統野菜のひとつであるおかひじきを栽培している。

三浦さんたちのおかひじきの特徴は完全無農薬で栽培している点にあるが、強みは独自の流通を持っていることだろう。一般的な流通では、生産物は市場取引によって価格が上下する。しかし、三浦さんたちのおかひじきは、地元の青果卸売業者が定額料金で全量を買取り、地元を中心としたスーパーで販売するという戦略で、安定した収入を確保できているという。

「また、出荷に時間とコストをかけない点も重要です。おかひじきの場合、パックで小分けせず、ダンボールにそのまま詰めることで労力とコストを削減しています」
そう教えてくれるのは、実践塾で指導員を務める山川隆平



右/有機栽培に必要な堆肥作りの指導もする山川先生
左/左から三浦さん、山川指導員、岡崎さんら舟形町農業振興課の皆さん



▲やまがた地鶏を飼育する庄司さん



上/地元レストランで人気の鮎重
下/地元産ラズベリーを入れたソフトクリーム



先生だ。
実践塾における山川先生の営農方針は「規模拡大をしない。既存の施設を上手に使い、無駄な労力を省きながら付加価値の高いものを生産する」というもの。
そして、この方針のなかでも山川先生が特に大切にしているのが

「農業を大きくしない」という部分だ。農業の大規模化を進める今の日本の農業から見ると反対のスタイルだが、「舟形には後継者がいる農家は少ないという状況があります。にもかかわらず施設や圃場を拡大するのは無理がある。そんなことよりも育苗時期以外は使っていないなかったハウスを毎年使ったり、雪室を作つて冬の時期でも出荷したりと工夫することこそ、舟形らしい農業が生まれるはずなんです」と力説する。

この方針はおかひじき生産にも活かされ、栽培に使っているハウスは、水稲育苗用にも活用。「我々、舟形の農家にとって、冬は基本的に休むものでした。それを実践塾が変えてくれました。今では、おかひじきの収穫が終われば、育苗ハウスにいろんな園芸作物を植えるようにしています。産直やスーパールの売り場が常に地元舟形の野菜で並ぶようにする。それは生産者にとっても消費者にとっても、とてもいいことなんだと実践塾の活動に参加して改めて気づくようになりました」と三浦さんは日に焼けた顔に笑みを浮かべた。
今年のおかひじき栽培倶楽部の「清流シャキシャキおかひじき」の生産量は4.5トン。これに加え、小松菜などの寒さに強い秋冬作物により周年栽培を確立しつつあるという。

やまがた地鶏の有名産地をめざして

次に訪ねたのが「やまがた地鶏」を生産する庄司市雄さんだ。
現在、やまがた地鶏の生産者は庄司さんを

含めて5人。平成21年に60羽から飼養を開始し、今年は1800羽に拡大した。

実践塾を通して、肉質に優れた山形由来の赤笹シャモと名古屋種の交雑種に体格のよい黄斑プリマスロック種をかけた「やまがた地鶏」を導入した理由は、なんと「高付加価値。」「営農規模が小さいからこそ、高品質で高付加価値の特産品を作っていく必要がある」という山川先生の戦略がここでも生きている。

「地鶏の飼育はブロイラーの約3倍、出荷までに120日ほどを要しますが、それだけに肉質の旨味は最高です。価値さえわかってもらえれば高く売ることができます。もちろん、始めた当初は販売面での難しさもありましたが、現在は地元の居酒屋が毎日決まった数で購入してくれるようになり、安定して出荷できています。でも、そうなると逆に羽数の確保を考えていく必要もあります」と庄司さん。
やまがた地鶏の種鶏は県の畜産試験場が管理しており、全体の生産量そのものが決まってしまうという。そのため、現時点では、舟形が独自に地鶏の生産量を増やせない状況にあるという。

「でも、そこも取り組み次第で解決できると思っています。生産者が増えれば、種鶏場を作ることも可能になるかもしれませんし、そうなれば、舟形は、やまがた地鶏の有名産地へと育っていくかもしれません」と庄司さんはやまがた地鶏の将来に意欲的だ。
「山形は牛、豚は盛んですが、鶏はマイナーなんです。だからこそ、舟形が地道にやっっていけば成功が見えてくる。誰もやっていない

行者にんにくを栽培する佐藤さん夫妻
今年からようやく出荷にこぎつけた



ことをするというのも小さな農業ではとても大切なこと」と山川先生は庄司さんの意欲を後押しする。

7年間の年月を費やして 行者にんにくを

最後に向かったのが「行者にんにく栽培倶楽部」の佐藤博さん宅だ。行者にんにくは通常であれば種から育てると出荷まで約7年もの年月を必要とする。それだけに簡単には取り組めない作物だが、実践塾では顧問である悪七幸喜さんの情熱的な指導の下、平成20年より根気よく栽培が続けられてきた。その苦労が実り、昨年の平成25年から念願の出荷が始まったという。

佐藤さん宅に伺うと、ちょうど来春の出荷に向けて最終段階となる促成栽培の準備にとりかかっているところだった。

「昨年からは出荷を始めましたが、来春（平成27年）からが本格的な出荷になります。こつこつと育ててきた成果がどう出るか今から楽しみです」と笑う佐藤さんは、昨年、会社員を定年退職し、人生の再スタートとして奥様のマサ子さんが取り組んできた行者にんにく栽培を手助けすることに決めたという。

「だから、いろいろとチャレンジしながら農業したいなって考えています。実践塾はまさにチャレンジの仕方を教えてくれるからありがたいですね」と実践塾に参加する喜びを語ってくれた。

行者にんにく倶楽部では、さらに種根の栽培数を増やし、新規で始めたい人に種根を譲れる仕組みを作ろうという計画も進められつ

つある。仲間を増やし、舟形行者にんにくのブランド化を図っていくことが目標だ。

小さな農業の大きな挑戦

「活気ある農業の創出」や「新たな特産品づくり」というフレーズは決して目新しいものではない。農業が基幹産業となる自治体であれば、そのほとんどがこれに近い活動を展開している。もちろん、舟形町もそういった市町村のひとつとして含まれるわけだが、実践塾の詳細を聞くと、その活動が実に個性的なことに気づく。

大規模化、集約化など、現代の農業の流れを理解しつつも「舟形」という風土に適した農業とは何かを一番に考えることがはじまりだった。結果、実践塾が行き着いたのが「小さな農業」だった。しかし、この「小さな農業」は決して小規模だけを意味するのではない。たとえば、わずか一棟のハウスであっても、頭を使い、工夫を重ねることで何棟分もの収穫を望んでいける。そうした農業を地域で共有することをめざしたのだ。

その原動力になったのが実践塾の人の輪だろう。役人も指導員も農家も流通に携わる者も、立場の境界線を引くことなく知恵を分け合い、笑顔を交わす。いつもそれがあつたからこそ、実践塾の試みが着実に前進しているにちがいない。

「舟形が好きだ。だからこそ、もつと良くないように挑戦したい」。実践塾に集う人たちは、今日もその情熱を共有しながらチャレンジを続けている。



暮らしの知恵を
次世代へ

山里の暮らしの知恵と 資源を活用して

「もくもく市場」
岐阜県郡上市明宝
くじょうしめいほう
「栃尾里人塾」

▲間伐材を原木・薪で販売する
明宝山里研究会の「もくもく市場」

10月最後の日曜日、紅葉と秋の味覚あふれる明宝では、各地でさまざまな行事が行われた。間伐材を山から降ろして原木、薪として販売する「もくもく市場」、集落の住民と都市の人が里人として暮らしの知恵や技を学ぶ「ふるさと栃尾里山倶楽部」の里人塾、そしてめいほう高原では秋祭りが開催され、3000人を超える人々が明宝名物の「鶏ちゃん」料理や千人鍋を楽しんだ。人口約1800人の地域に18の地区団体と3つのNPO法人がある明宝地区。地域情報の窓口を担うNPO法人「ななしんぼ」にとっても超多忙な一日だった。



▲トラックで原木を購入する親子と明宝山里研究会員



▲原木を中心に購入、アウトドア派の大屋さん家族

間伐材の再利用をめざす森人たち

▼明宝山里研究会の人たち。元森林組合OBの経験や林業家としての技術を生かして、間伐材の再利用を訴えてきた



郡上八幡から飛騨高山へ至る国道472号は「飛騨美濃せせらぎ街道」と呼ばれ、そのほぼ中央に位置しているのが郡上市明宝地区。東海北陸自動車道の開通により郡上八幡ICから車で約20分ほどで明宝の南玄関口にある道の駅に到着する。吉田川の溪流に沿うように国道が南北に走り、河岸段丘の斜面に7つの集落が点在している。

明宝山里研究会が開催する「もくもく市場」は明宝庁舎近くの広大な広場で行われていた。もともと木材置き場だったというが、その日は森から搬出してきた原木が地面を埋め尽くし、長さ40cmに切断した玉切りやカットした薪材がうず高い壁を作って並んでいる。樹種はスギ、ヒノキ、ナラ、ミックス（ナラ以外の広葉樹）で、広場は芳しい木の香りに溢れている。

早速購入を予約していた人々がトラック等でやってきて、木材の積上げ作業をしていた。

土岐市からきた大屋啓さん一家は小型トラックをレンタルして来て、ヒノキとミックス材をトラックの荷台いっぱい購入した。「切った木は割高になるので、丸太で買って自分で薪割りを楽しみます。これだけあれば今年の冬は暖かく過ごせます」と帰って行った。

郡上市からきてナラの原木を2セット購入した親子は「ナラは木が硬いので日持ちがよく薪材としては最高です」と3万円を支払ったが、「おまけ」としてスギとヒノキも少量購入した。

これは間伐材の有効利用を目的にもくもく市場を開設したことから、会ではナラやミックス購入者にはスギやヒノキも購入してくれるようにお願いしているため。

同会の会長の松山誠美さんは「確かにスギやヒノキは点火しやすいが燃え尽きるのも早く、薪としての人気はいまひとつです。でも軒下に並べておくだけで防虫機能があるので、アリ駆除に役立ち、さび止めの効果もあります。燃やしても並べて置いても木の香りが楽しめます」とスギ、ヒノキのPRを忘れない。

明宝地区の山林は48%が針葉樹林だが、残る50%余が広葉樹林で、岐阜県の中では広葉樹林が多い方だという。そのため間伐材ではナラも登場するが、価格はスギ原木4200円に対してナラは15000円とかなり高い。炭として昔からウバメガシに並んで人気がある木だ。

しかし広場に並ぶ各種の原木をみると、間伐材とはいえ、数十年という年月を厳しい自然の中で生き抜いてきた逞しさと尊厳さを持つ

▼購入した原木をその場でカットしたり焚き木用に割る。左下「もくもく市場」の会員たち。下左は会計係の山中さん、中央は松山会長



つて堂々と横たわっている。運搬費が高くて採算が合わないという理由で放置してしまうのでは、木にとっても山仕事をしてきた人々にとっても不遇すぎる、救われない思いだ。伐採した木々は、それを活用することで森林の再生、自然環境の保全に繋いでいきたい。



そんな思いから平成23年9月に地区内の自伐林家、森林組合OBら11名で明宝山里研究会を設立、山へ入って間伐材を搬出し、原木を薪用に活用する活動をはじめた。翌23年秋

に「もくもく市場」を開設してこれらの販売をスタートした。

「明宝は95%が森林ですが、国産材価格の低迷で森林所有者も山への関心が薄れ、間伐材は放置され、それが森の保全にも影響がでてきました。私たち会員は山仕事のプロ。まだ現役で働けます。都合がつく人が集まって週3回は山に入り、間伐材を搬出し、木の整備、加工等に当たってきました。森林組合も協力してくれませんが、ここに並んでいる木材の80%は自分たちで搬出してきたものです。会の活動に賛同する若い人も加わり、会員は15名になりました」と松山さんは語る。

会では市場開設に伴い、販路の拡充をPRするためのチラシ制作と雑誌掲載料等の費用に過疎対策事業債を充当した。「この費用でチラシの制作が出来、販路が広がりました。僅かですが会員にも手当を支給できるようにしました」と松山さんはあくまでも謙虚だ。薪割り体験や薪ストーブユーザーを対象にした交流体験イベント等も実施した。事業開始から3年目で、原木と薪の取扱量は大幅に増加してきた。森の保全・再生をめざす会の活動への理解に加えて、量販店等に比べて優良材が大幅に安く購入できることも人気のようだ。林業関係者からも副業型林業に向けた仕組みができたと注目されている。

この日も会員たちが交互に現場に立って、購入者へのアドバイスや積み込みの手伝いをしていく。その理由を会員たちは、「山に入ったり木に触れていないと体が鈍ってしまうからね」「仲間と働いていると楽しいから」「わしらが運んできた木の嫁ぎ先を見ときたいから

ね」等々と照れながら語る。

その後も、購入を予約した人やアウトドアに関心のある人が時々やってきて木の幹や薪に触れていく。一家4人で訪れた山下さん家族は積み上げてある薪を大量に購入、5万円を支払った。「3年前に新築した家はオール電化でソーラシステムも導入しましたが、暖房は薪ストーブ一つだけ、家中が温かくなります。火を炊くのは楽しく、皆が集まる場所になります」とご主人は言う。

原木を購入した後、会が用意した機器を使ってチェーンソーで切断作業に励む人もいる。皆が真剣に楽しそうに木と対話している感じが広場にあふれていた。

今年の市場の開設は今回で終了するが、電話注文すればいつでも購入できるとのことであった。

里山の魅力を伝承し発信する

今回の取材で窓口になってくれたのがNPO法人「ななしんぼ」。地域の「黒子」として活動する団体で、明宝山里研究会の電話代行を行うほか、情報発信拠点として地域の各施設やグループ活動、イベント等の紹介を担っている。

工場だった建物を改装して誰もが気軽に集まってお喋りできる場、コミュニティ・カフェを運営し、施設内にはレンタルキッチンや木工旋盤工作機等があるモノ作り工房もあり、ワークショップとして利用する若いグループが増えている。

もくもく市場の取材のあと、訪ねたのが「ふるさと栃尾里山倶楽部」(代表/置田憲治さん、

▶「栃尾里山倶楽部」の皆さん。森や畑で作業を行い、打ち合わせ会のあと解散となる。同家は谷水や太陽光等を利用したエネルギーシステムを採用しており、畑には案山子も立つ



▶左／収穫した新米
右／畑でもみ殻を使って
たき火を楽しむ会員たち



受付／ふるさと郡上会。市場からほど近い二間手という集落の山沿いにある「下組」の住民が中心になって、都市の人と一緒に里山に息づく知恵や農の技を学び伝承する「栃尾里人塾」を開催している。築100年の空き家だった古民家「源右衛門」を家主の好意で改修して、地元と都会から通う塾生が集う家として活用している。

その日も約30名の里人が集い、皆が田植えから手がけてきて収穫したお米を配布していた。スタートして3年、約400人が参加して田畑の農仕事、山での下草刈りや間伐、囲炉裏の製作、農機具の手入れ等々、里山の暮らしを体験し知恵や技を学んできた。その中から4組が移住してきている。そういえばもくもく市場の会計を手伝って

いた山中佐代美さんも明宝が好きでIターンしてきた人。結婚して二間手に住み、ご主人は個人で山仕事を請け負い、佐代美さんは地域おこし協力隊等を経て現在は市内の病院で週3日働いている。夫妻の楽しみは耕作をやめた農家を引き継いで奥山でわさび畑を栽培することだという。

「明宝の人たちは自然の恵みを生かした暮らしを楽しみ、誇りに思っていて暮らしている。移住者にもとても親切で、お役に立つなら何でもお手伝いしたい」と語っていた。

めいほう高原のスキー場では「めいほう高原秋まつり」が開催され、各地から来た観光客で大賑わいしている。クラシックカーやスーパーカーが勢ぞろいした車サミット、特大鍋で煮た具沢山とん汁を無料で提供する「千人鍋」、明宝名物の鶏肉料理を楽しむ「鶏ちゃんコーナー」。

舞台では地元太鼓保存会や市民吹奏楽団等の演奏も行われていた。

めいほう高原秋まつりは郡上市を代表する秋祭りとして人気だそうで、この日のために企画準備してきたのが明宝振興事務所の置田優一所长。目の回るような忙しさの中でお話を

聞かせていただいた。

「今回は郡上市の市制施行10周年を記念し、沢山のイベントを用意しました。明宝は昔から土地に適した農産物の栽培、畜産、林業への取り組みと、これらの資源を活用した地域づくりが熱心な地区でした。秋祭りは、明宝の農産物や食文化を一堂に会そうと始めたものですが、『鶏ちゃん』のように行列のできる郷土料理も生まれました。1800人の地区にボランティア活動を含めた住民のグループが18、地域おこしのNPO団体も3つあります。行政はそれをサポートしているだけ。今日も市民総出でお手伝いしてくれています」と語っていた。

「鶏ちゃん」もハム・ウインナー等の特産品も食べ損なってしまったので、後日ゆつくり訪ねたい。文／横田塔美 写真／小林恵



▲「めいほう高原秋まつり」を主催する明宝振興事務所の置田所长



▲明宝名物「鶏ちゃん」を買い求める人の長い列

地域の見守り役も担って 予約型乗合タクシー

福岡県八女市やめし

高齢者の行動 エリアに基づいて



▲タクシー利用の電話を受ける予約センターのオペレーターたち



▲乗合タクシーの運転手富田一朗さん



▲小井手恒則予約センター所長

リーンと大きな音で黒電話のようなベルが鳴る。「ハイ、予約センターです。お早うございます。ハイハイ、11時の便は、どこまでですか。行きし

やつとは堀川のバス停まで良かですか。乗れるごつ、準備はしとつてくださいね。ハイ、ありがとうございます。予約型乗合タクシーを利用するのは、地域の高齢者がほとんど。方言で話して

決められている。利用者は同一エリア内を一律300円で利用するのが原則である。実証運行以前から運営に係わり、現在は予約センター所長を務める小井手恒則さん(65)は、「運行を開始する前に、利用対象者として想定される高齢者が、普段どのような行動をされているかを調査させてもらい、その結果、旧町村内で用が足りるコアな生活をされていることが判ったのです」と、エリア内利用を決めた理由を説明する。利用者の声を聞いてみても、需要はエリア内利用で満たされているようだ。

旧黒木町笠原地区から同町の中心部にある整形外科医院に来ていた酒井アツユさん(84)は、「玄関まで送ってもらうけん助かります。9時んとで来ました。乗合ですつと廻るでしようが、そつで時間の掛かる時もありますね。タクシーなら2000円を超えるけん。年金じゃ出しきらんもん」と、多少時間が掛かることはあつても満足しているようで、最後に「長〆続けてもらわなですな」と付け加えた。

◀黒木町上田代を走る予約タクシー

八女茶の産地として知られる八女市は、平成22年に周辺2町2村と合併し、福岡県で最も広い面積の自治体となった。その多くが山間地域であり、高齢化率も全国平均を上回る。合併を機に市は「定住自立圏構想」に基づく町づくりをめざし、その柱として予約型乗合タクシーを九州で最も早く導入した。第一次実証運行を開始してから丸5年になる現在、愛称は「ふる里タクシー」と決まり、高齢化した女性たちが安心して暮らすには、なくてはならない交通システムとなっている。

くれるオペレーターに親しみを感じるようだ。次々とかかってくる予約電話を受けたオペレーターたちが、目の前のディスプレイに表示されている乗車位置を示す赤い丸と、降車位置を示す青丸を一筆書きで繋ぎ、この朝のふる里タクシーの運行ルートが決まっていく。利用者は事前に住所などを登録しているので、電話で名前を伝えると、ディスプレイの地図上に乗車位置が表示される仕組みなのだ。

ふる里タクシーは、平成22年2月に2町2村と合併した八女市全域をカバーしながらも、合併以前の9町村を基本に11の運行エリアが

手元に「乗降場所用間ベスト40」という表がある。この一覧表を見ると、一番利用があるのはAコープくるき

店、二番目には市内にただ一つの公立総合病院、三番四番は整形外科と個人病院となっている。続いて多いのは、幹線路線バス(堀川バス)のバス停。



この表で読み取れるのは、利用目的は主に買い物と病院通いで、エリアを越えて移動する場合（例えば、旧町村から市中心部の総合病院へ行くなど）は、自宅からバス停までをふる里タクシーを利用し、そこからは路線バスを使っていることだ。このように、既存の路線バスとふる里タクシーを組み合わせることで、お互いの不便さを補い合う仕組みが機能しているといえる。

乗降者の体調チェックも

予約型乗合タクシーの良い点は、単なる移動手段だけでなく、乗合であるために自ずと地域の情報が運転手やオペレーターの耳に入ってくることだろう。

予約センターの小井手所長は、「頻繁に利用されていた方の利用が無くなったら、社会福祉協議会などに連絡してヘルパーさんを派遣していただいたり、ドライバーから乗客の体調が悪そうだと報告された時には、ケアマネージャーに連絡したりすることもありますね」と、地域の見守り役にもなっていると言う。

乗降者の一番多いAコープくろぎ店から旧黒木町上田代の自宅まで帰る堤美千子さん（80）に同乗させてもらった。「週1回は最低でも使います。前はですね、タクシーで帰って4000円ぐらいかかりましたけれど、3000円じゃ赤字ですばい。ほんなこてですな」。ここで乗車したのは女性3人。一人は、すぐ近くの整形外科で下車。「欲を言えば、土曜日の午前中まで運行してもらえればね。土曜日は病院がまだあつちよでしょうが」と、降り際にひと言葉望を聞かせてもらった。

この病院で乗車したのが93歳の依吹藤吾さんだ。「友だちが居らんごつなつてしました。大正10年会ちゅうて70人ぐらい集まりよつたですよ。今年は8人しか。そつで止めとちゅうて」。こんな話を聞かせてもらっているうちに娘さんの家の玄関先に着いた。ここで遊んで帰るのだと言う。近所に友だちが居なくなつた依吹さんが、娘の嫁ぎ先へ遊びに行くのにも利用できる便利さと低料金なのだ。

依吹さんが降りるまでの間にも、短距離を利用する乗客が3人あつた。最後には、堤さん一人が乗客だ。ふる里タクシーは幾つもの集落を抜けて走り、40分ほど掛かつて上田代に到着した。運転席横の料金台に300円を置きながら、何度も頭を下げた堤さんは、両手に買い物袋をぶら下げて自宅の玄関へ。路線バスなら入って来られない奥まった集落まで運転してきた富田一明さん（63）に、ふる里タクシーの運転手として印象的なことはと問うと、「ありがとうつて言うて300円置いてくるつとが嬉しいですね。それに、たまにイノシシとかが道路に出てきとることがあつですね」と、笑つた。富田さんが、乗客に配つていたチラシには「衆議院選挙の期日前投票で投票所への利用は無料（選管が負担）です」とあつた。

予約型乗合タクシーの第一次実証運行の開始から丸5年が経とうとしている。ふる里タクシーの事業主体である八女市地域公共交通協議会は、平成25年に地域公共交通優良団体国土交通大臣の表彰も受けた。平成25年度の維持管理費60,541千円を賄う財源として、総費用の68%に当たる41,000千円が



過疎対策事業債で当てられている。最後に予約センター小井手所長に今後の展望を聞いた。「高齢者の利便性を考えてテレビ画面からの予約を可能にしたり、行政情報をテレビで流すなど、予約の基本システムを利用した住民サービスや商店街との連携で乗合タクシーの乗車券をポイントで提供するなど、福祉と地域活性化を組み合わせたふる里タクシーの活用に知恵を出していきたいですね。『これで住み続けられる』の声も、高齢化率47%の旧矢部村では出ていますので」

ふる里タクシーの利用者は、70歳代と80歳代で81%を占め、利用者の84%が女性である。旧黒木町だけでも毎日80人を超える利用者がいる。閉じこもりがちな高齢者が気軽に外出でき、地域の情報交換の場になるふる里タクシーは過疎地域になくしてはならない足であることは確かなようだ。

写真・文 芥川仁

●八女市総務部地域支援課
☎0943-23-1224

上左/自宅前で予約タクシーを降りる乗客
上右/乗客の荷物を持つ運転手
下/娘の家を訪ねた乗客



交通体制の整備

農業体験・ボランティア活動に無料バス 緑の直行便「グリーンライナー」

新潟県十日町市
とおかまちし

十日町市や上越市は首都圏の人を対象に「越後田舎暮らし体験ツアー」を早くから実施し、農業体験やボラ

ンティア活動で訪れる人が多い。そんな個人やグループにとって、最もネックとなるのが交通アクセスである。上越新幹線の越後湯沢駅でほくほく線に乗り換えれば、3時間以内で十日町駅に到着するため、時間的には便利になったが、農作業等のために時々出かけた人にとっては、交通費や乗り換え等は結構きつい。といってマイカー利用は一部の人に負担をかけやすく、土日は首都圏からの高速道路は大抵渋滞する。

そんな声に対応して、十日町市では農業体験等で来市する人の利便性をはかり、来市する頻度を高めてもらおうと平成23年5月から無料バスの運行をはじめた。

事業主体は一般社団法人十日町市観光協会だ。運行は東京中堅のバス会社に委託。5月から10月まで土日に東京発着の無料バスを約20往復運行している。そのため運行経費や予約サイト開発運営費には過疎対策事業債を充当している。

23年の初年度は17便運行し、利用者は首都圏の41自治体在住者で、一便当たりの利用者は平均26人だったが、24年には知名度も高ま

り14便運行して一便当たり29人が利用した。

7、8月の土日は子どもグループの利用もあり、バス定員の45名満席という日もあった。

26年度最後の運行になる10月11日の朝新宿西口へ出かけてみた。バスで観光地へ出かけるツアーが一般的になり、西口は早朝から老若男女で溢れ、各社のバスが数分間隔で来ては客を乗せて出発していく。グリーンライナーは世田谷区役所前を7時30分に出て8時に新宿西口・工学院大学前に到着した。真新しい美しい車体で、バスガイドさん付き。

乗車を待っていた女性は「世田谷柵田の会」メンバーで、月一度は皆と十日町の柵田へ出かけるという。「無料バスで往復できるようになりとても助かっています。毎週出かけて休耕地や林の手入れをする人もいます」と語る。バスには世田谷から乗車してきたメンバーがすでに10数名、温泉旅行に行くという家族連れもいる。客席もゆったりしていて、乗車しているだけでも楽しそうだ。

12時30分頃に十日町駅西口に到着、昼食の後地元農家の車に乗って柵田へ出かけるという。翌日は午前中は農作業、温泉で入浴・昼食等を楽しみ、十日町を午後2時30分に出発して午後7時過ぎに東京へ帰ってくる。

利用条件としては、①ボランティア活動②宿泊施設利用の2つが必須で、3日前までにホームページの専用サイトで申し込むこと。



▲十日町駅前到着して観光協会職員や農家の人に出迎えられる乗客



▲「バスをよく利用する」と語る世田谷柵田の会の女性たち
◀新宿駅を出発する緑の直行便グリーンライナー



市では、田舎で農業体験等をしたという首都圏の潜在的市民にお試し利用してもらったり、訪問回数を増やしてもらうことで、耕作放棄地の解消、交流、農産物の販売や観光施設の利用拡大につながりたいと期待している。

文／浅井登美子 写真／小林恵

●(一社)十日町市観光協会
☎025-757-3345
<http://www.Tokamachishi.Kanko.jp>

INFORMATION

全国過疎問題シンポジウム

2015 in かがわ

- ・開催日(予定)
平成27年10月8日(木)～9日(金)
- ・開催場所(予定)
1日目 全体会・交流会/香川県高松市
2日目 分科会・現地視察(4会場)
香川県東かがわ市、小豆島町、直島町、琴平町



瀬戸内海

瀬戸内海は、日本にとって古くからの交通・交易のルートとして栄え、現在も産業や環境を支える「海の道」です。その瀬戸内海と深いかわりを持つ香川県は、都市の利便性と自然環境が調和したまちづくりを進めております。

2010年から3年に一度、「海の復権」をテーマに島々を舞台として開催している「瀬戸内国際芸術祭」などを通じて、瀬戸内海や香川のアート・自然・暮らしの魅力を国内外に広く発信しています。

伝統的「お接待」「おもてなし」の心で、全国の皆様のお越しを心よりお待ちしております。
[事務担当] 香川県政策部政策課地域づくり推進室
☎087-832-3125 (担当/杉、渋谷)

編集後記

▼旧知の農家Sさん(82)から「定年退職した三男が帰郷して農業を継いでくれることになり、長男も土日には来て手伝ってくれる」と便りがあった。Sさんは専業農家だが、4人の息子全員を都市へ出しサラリーマンにした。以前私は「なぜ一人だけでも農業を継いでくれと言わなかったのか」と聞いたことがある。Sさんは「私は中学を出て農業専門学校に行くつもりだったが、教師からも村の人からも百姓が学問してどうなると言われて止めた。その悔しさから息子たちは大学や専門学校に行かせた。三男は途中で名古屋の会社を辞めて親父の農業を手伝うと言ったが、恥をかかせるなど追い返した」と語り、「後継者を育てなかった我々農家の責任は大きい」とぼつり。頑張ったSさんによやく春が来たようだ(A)

De POLA No.45

[でぼら] 2015年

発行日/平成27年3月5日

発行/全国過疎地域自立促進連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集/㈱編集工房アド・エー

過疎対策事業債(ソフト分)の主な事業と活用状況

■主な対象事業

①地域医療の確保
医師確保事業(診療所開設費用補助) ICTを活用した遠隔医療

②生活交通の確保

コミュニティバス、デマンドタクシー等の運行バス路線維持に向けた民間バス事業者への補助

③集落の維持及び活性化

集落支援員の設置、集落点検や集落課題の話し合いの実施 移住・交流事業(インターネット広報や空き家バンク等)

④産業の振興

農業の担い手・人づくり対策、6次産業化企業誘致・雇用対策(コミュニティビジネスの起業等)「その他」高齢者支援、子育て支援、教育振興、森林対策、鳥獣被害対策、伝統文化振興、自然エネルギー関係、防災対策等

■発行額

市町村ごとに総務省令により算出した額の範囲内で発行が可能。平成22年度は発行限度額の総計約662億円に対して発行は379億円(活用率57.3%)であったが、年々発行が増え、25年度は発行限度額総計約745億円に対して発行は616億円(活用率82.6%)に達している。

■活用状況

事業分野別では、「産業の振興」が最も活用さ

れ、次いで「高齢者等の保健・福祉の向上及び増進」、[交通通信関係の整備、情報化及び地域間交流の促進]となっている。平成25年度における活用率(都道府県別)については図1参照。

過疎地域等自立活性化推進交付金(総務省)(平成26年度)

地域資源を活用した過疎地域の自立活性化の推進

(1)過疎地域集落再編整備事業

定住促進団地整備事業 定住促進空き家活用事業 集落等移転事業 季節居住団地整備事業

(2)過疎地域遊休施設再整備事業

過疎地域の廃校舎等の遊休施設を活用して行う、生産加工施設 資料展示施設 教育文化施設・地域芸能・文化体験施設等の整備に対して補助

(3)過疎地域等自立活性化推進事業

先進的で波及性のあるソフト事業を幅広く支援

生活の安心・安全確保対策 移住・交流・若者の定住促進対策 地域文化伝承対策等

(4)過疎集落等自立再生対策事業(図2)

地域住民等が集落を維持・活性化するために総合的に取り組む事業等を支援

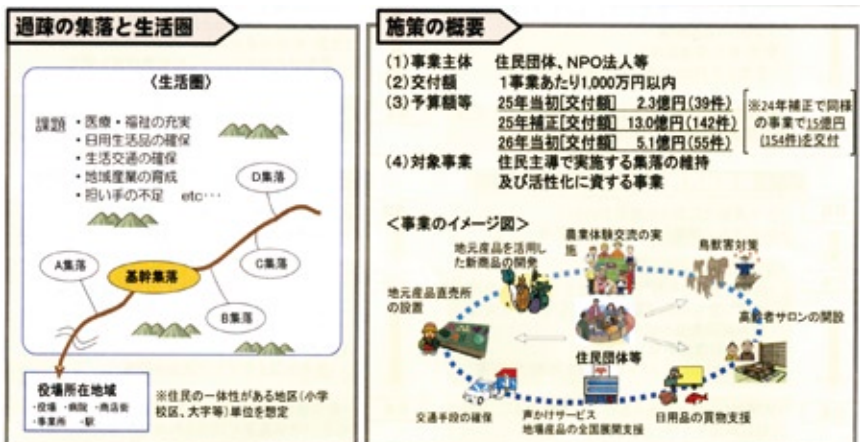
安全・安心な暮らしの確保対策 地区の地域資源を活用した産業・生業の振興

図1 過疎対策事業債(ソフト分)の都道府県別活用率(平成25年度発行予定額ベース)

※活用率=各都道府県の過疎市町村の発行予定額の総和/各都道府県内の過疎市町村の発行限度額の総和
なお、100%以上の団体については、平成24年度からの活用率向上を活用した団体である
※静岡県、京都府、岡山県について、数値を含む数値である

活用率	団体数	都道府県(活用率:%)
95%以上	11	兵庫県(150.4%)、鳥取県(136.0%)、長崎県(122.3%)、和歌山県(115.4%)、福岡県(111.5%)、京都府(107.7%)、高知県(101.7%)、石川県(99.6%)、茨城県(97.9%)、山形県(97.4%)、北海道(96.3%)
95%未満 80%以上	8	富山県(92.5%)、広島県(91.4%)、千葉県(91.1%)、三重県(91.0%)、栃木県(89.8%)、新潟県(86.2%)、山口県(82.1%)、山梨県(81.9%)
80%未満 60%以上	14	長野県(77.8%)、鹿児島県(77.8%)、宮城県(76.7%)、鳥取県(75.2%)、佐賀県(75.1%)、香川県(73.1%)、青森県(72.0%)、大分県(65.6%)、宮崎県(65.4%)、福島県(65.2%)、秋田県(63.6%)、岡山県(62.5%)、徳島県(61.0%)、奈良県(60.6%)
60%未満 40%以上	6	福井県(58.3%)、岐阜県(58.0%)、群馬県(57.3%)、愛媛県(57.2%)、沖縄県(55.5%)、岩手県(54.5%)
40%未満 20%以上	5	静岡県(34.0%)、愛知県(33.7%)、熊本県(31.9%)、滋賀県(31.0%)、埼玉県(24.5%)
20%未満	1	東京都(0.0%)

図2 過疎集落等自立再生対策事業



[DePOLA] Back Number (近刊号)

No.37 地域活性化のサポート隊



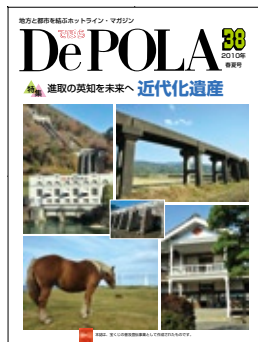
三宅村の農林漁業の再生に取り組む／東京都島しょ農林水産総合センター 心にも豊かな森林を／長野県林業大学校・木曾南部森林組合 和紙職人をめざす／島根県浜田市 地域医療の再生とまち創り「夕張希望の杜」 地域医療をプロ集団が担う／磐梯町保健医療福祉センター 水源の森を企業と地域で守る／福岡県朝倉市・東峰村 達人たちがガイドする熊野の豊饒な世界へ／紀南ツアーデザインセンター お父さんパワーを結集して竹林整備／奈良県宇陀市室生町 月山山麓に再現した山形県鶴岡市「庄内映画村」

No.41 これが自慢の味・風土・人——地域ブランド作戦



生いもこんにやく NO.1(群馬県東吾妻町・小山農園) 450年の歴史を経て、西海えだおれなす(長崎県西海市) 飼料用米生産と「こめ育ち豚」(山形県遊佐町) 森を救う家具「ニシアワー」(岡山県西粟倉村) 京丹波の伝統作物(京都府京丹波町) 山里文化を語り継ぐ「遠野物語」の里(岩手県遠野市) 富良野ペンダーの里(北海道中富良野町) 米蔵・しおまち唐琴通り・須恵器(岡山県瀬戸内市牛窓) 「森の香茅蒲ご膳」(佐賀市富士町) トキと暮らす郷(新潟県佐渡市)

No.38 進取の英知を未来へ——近代化遺産



◆北の大地に夢を拓いた北海道遺産／根釧台地の格子状防風林(根室地区) 稚内港北防波堤ドーム(稚内市) 佐賀家シン番屋(留萌市) ◆新時代を先取りした近代化施設／尻屋埦灯台と寒立馬(青森県東通村) 旧大湊水源地堰堤(青森県むつ市) 読書発電所・桃介橋(長野県南木曾町) 三角西港の石積埠頭(熊本県宇城市) 旧郡築新地桶門他(熊本県八代市) 旧登米高等尋常小学校(宮城県登米市) 鑄造造船で近代化に挑戦(山口県萩市) 石見銀山・温泉津温泉(島根県大田市) 魚梁瀬森林鉄道(高知県馬路村他)

No.42 新たなコミュニティの実践——農山漁村の再生



中山間地域の住民をサポートする(高知県仁淀町・越知町・いの町) スキー場跡地に森林を復元(長野県長和町) 天草漁師の「ひと網オーナー制度」(熊本県天草市有明町) 油屋・万屋・車屋を地区で運営(広島県安芸高田市川根) 「元氣かい! 集落応援プログラム」(和歌山県田辺市) 協力隊から起業・就職(北海道喜茂別町) 女子大OB生の田舎暮らし&地域おこし(茨城県常陸太田市) おといねっぴ美術工芸高校(北海道音威子府村) 観葉植物栽培日本一(鹿児島県指宿市) 環境モデル都市(高知県橋原町)

No.39 交流・協働で地域を元気に



東京農大生の里山保全活動(福島県鮫川村) 「風の谷・森林の楽校」(岐阜県揖斐川町) 八木沢集落の地域おこし協力隊(秋田県上小阿仁村) 協力隊で山村生活を体験(岐阜県高山市) 栗島に住んで二年目・西畑さんの報告(新潟県栗島浦村) 「きみの定住を支援する会」(和歌山県紀美野町) 「ゆめ倶楽部 21」 「米作り塾」(和歌山県日高川町) お母さんの知恵袋「四季の里」(静岡県川根本町) おやきの里(長野県小川町) 大石田そば街道(山形県大石田町)

No.43 1ターンして新規就農——地域の農の新しい風



担い手を育成して地域活性化(大分県由布市庄内町、豊後大野市) 河岸段丘は命と恵みの大地(新潟県津南町) 「南郷トマト」の若い担い手(福島県南会津町) 農家の心意気をニューファーマーに(北海道士別市朝日地区) 自家製レモンで大三島リモンチェッコ(愛媛県今治市上浦) 「農業をする」という人生の作り方(岩手県西和賀町) 地域の産直市「お山の大将」(徳島県美波町) 休耕田にしない・親子で米作り(広島県庄原市総領) 昔の味を「げんたの野菜」(山梨県笛吹市芦川) 高原を彩るヒマラヤの青いケシ(長野県大鹿村) 環境未来都市しもかわ(北海道下川町)

No.40 夢を紡ぐ——地域伝統のものづくり職人



大館曲げわっぱ(秋田県大館市・栗久) 南木曾「木地師の里」(長野県南木曾町・野原工夫) むらかみ町屋再生プロジェクト(新潟県村上) 三津谷煉瓦窯再生プロジェクト(福島県喜多方市) 伝統の切れ味、土佐打刃物(高知県香美市土佐山田町) からむし織の里(福島県昭和村) い草の育成とゴザ織り(熊本県八代市) 三好お札の里(徳島県三次市池田町) 縮れ穂栽培から、南部簞(岩手県九重村・高倉工夫) 秋山郷が紡ぐ、猫つぐら(長野県栄村) アイヌ文化を未来へ伝える(北海道平取町二風谷)

No.44 人々が集まって、はじめる——ふるさと再生作戦



「美味しい」の感動をつなぐ島(山口県周防大島町) 貴重な動植物と農業青年を育む里山(鳥取県日南町) 四ヶ村の棚田と肘湯温泉で創るふるさとのにぎわい(山形県大蔵村) 主役は子供たち(福島県伊達市月館町) 馬にふれ、馬たちの時間で暮らす(北海道浦河町) ボランティアが続ける森や里山支援 / (UON NETWORK 森の楽校 田畑の楽校) 産学官でオホーツク地域産業の創成を(東京農大オホーツク実学センター) 平成25年度過疎地域自立活性化優良事例 / 民家は地域資源、リフォームして定住促進へ「奥矢作森林塾」(岐阜県恵那市) 生姜栽培を復活して開拓魂を受け継ぐ(鹿児島県西之表市) 雪浦ウイーク(長崎県西海市) 寄り会みなまた(熊本県水俣市) 若松ふるさと塾(長崎県新上五島市) 会津山都そば協会(福島県喜多方市)

★詳しい内容については <http://www.kaso-net.or.jp> を参照ください。残数が少ないため進呈出来ない号もあります。